
IS インフィニット・ストラトス ~もう一人の天才~

Sch?pfung

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス ～もう一人の天才～

【Nコード】

N2089S

【作者名】

Sch?pfung

【あらすじ】

ISは女性にしか動かせない・・・そんな常識を壊した織斑 一夏。

ISを動かせる唯一の男性として鳴物入りでIS学園に入学し、女性だらけの生活を送りはじめた織斑 一夏の前に転校してきたのは、少し訳ありな男（日本人）と女（国籍不明）。

そんな、原作と少し異なった世界が、今、始まる・・・。

IS インフィニット・ストラトスの二次創作ものです。主人公最強のご都合主義な内容。IS以外にもガンダム00関連のものな

ども出てきます。オリジナルストーリーも出していききたいですが、勢いだけで書いているのでどうなるかわかりません。ちなみに作者は原作をよく知らない・・・。

プロローグ（前書き）

はじめまして。

こついうものは初めてなので手探り状態です。

感想、御指摘があれば随時承ります！！

プロローグ

「失礼します。お呼びでしょうか？」

少し初老に入りかけた男性が座る部屋に、一人の青年が入ってきた。

「委員会から指令が出た。」

青年の雰囲気が一瞬険しくなるのを感じて、男性は続けた。

「そんなに身構える必要はない。」

「今回はどのような任務なのですか？」

「ある人物の監視、及び必要な場合の護衛だ。」

青年の雰囲気は変わらない。

青年は高級そうな椅子に座っている男性に言葉を返した。

「ある人物とは誰ですか？ 某お騒がせな博士ではありませんよね？」

「お騒がせな博士というのは君もだろう？」

男性は少し皮肉ったように返答し、青年の顔を伺っている。

青年はこれといって気にしていないように、ポーカーフェイスだ。

「まあ、いい。話をしよう。君はISについてどれだけ知っている？」

IS

正式名称「インフィニット・ストラトス」。宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツ。従来の兵器を凌駕する

圧倒的な性能を持ち、現在では各国の抑止力の要になっている。

「コア以外はすべて把握していますが。」

「あまり謙遜するな、君は例の博士の製造したコアを一部解析しているだろう？」

「・・・・・・・・・・。」

「では、女性以外でISを操縦できるようになったというのも知っているな？」

そう、ISは女性にしか扱えない事になっていた。事実、扱えなかった。

しかし、先日ある事件により男性でも扱える可能性が出てきたのだ。

「その人物を監視せよ、ということですか？」

「理解が早くて助かる。しかし、『監視』ではなく『監視、及び必要な場合の護衛』だ。」

「必要な場合の護衛とはどういう事ですか？」

「やはり気になるか・・・・。委員会の中でもな意見が割れていてな、その譲歩という形でこうなったのだ。」

男性で初めてのIS操縦者、それは少なからず誰かに狙われる可能性がある。

委員会つまり、国際IS委員会のなかでも意見が分かれているのだ。急進派は彼に対し24時間の監視と護衛をつけるべきと進言。

穏健派は彼の高校生活をできるだけ自由にするべきとし、監視、護衛をつけないべきだと進言。

会議は連日続いたが、お互いの譲歩としてこのような形に落ち着いたということだ。

「つまり、あまり手を出すなということですか。」

背景を聞かされた青年が口を開く。

「ああそうだ。ただし、彼には友好的に接するよう心がけてくれ。」

苦笑いしながら、男性は返答した。

「了解しました。」

「君の部隊からもう1人この任務につく者を選び、君とその者の2人で行ってくれ。」

「選考は？」

「君に一存する。君の機体だが、ヴァーチェまでは使用を許可する。それ以上の使用は司令本部の許可をとってからにしてくれ。」

「了解しました、司令。」

「もう下がってよい、准将。定時報告を忘れるなよ。」

「はっ!!」

青年は司令と呼んだ男性から封筒を受け取り、敬礼し退出した。

ブログ（後書き）

いかがでしたでしょうか？

次は設定を掲載予定です。

感想、御指摘、誤字脱字などがありましたらコメントして下さい。

設定（前書き）

今回は主人公達の設定を載せます。

文才が無い自分が嫌い。

こういう設定をする時が一番楽しいのはなぜだろう・・・。

一部追記しました。

設定

オリジナルキャラクター

名前 カタギリ 片桐 ヤマト 大和

年齢 19歳

階級 准将

専用IS ヴァーチェノケルベロス

国際IS委員会直轄の非公開組織「ソレスタル・ビーイング」所属。5つある小隊を束ねる総隊長。本作の主人公。

若干、19歳にしてこの世界にある知識を全て修めている稀代の天才でもある。

ISのコアについてもブラックボックスのほとんどを解析し、ISのコアに近いものをつくることができる。

男性でも扱えるISを研究する過程で、擬似ISを作ったことから国際IS委員会に目をつけられ、監視下に置かれる。以降非公開組織に所属させられ、表舞台からは存在を完全に抹消される。放浪癖があり、委員会の監視を逃れよく旅をしているが、撫子に連れ戻されている。

高い身体能力を持ち、生身でもISと善戦できる。その本質は、他を圧倒する動体視力、反射神経、情報収集・解析能力、空間認識能力によるもの。現在、世界で唯一脳量子波を完全に扱うことができる。

篠ノ之 束、織斑 千冬とは旧知の仲だが、「ソレスタル・ビーイング」に所属してからは全く連絡を取り合っていない。

感情の起伏が皆無であるかのように常にボーカalfフェイスだが、それなりに感情は持っているため、背中を預けている撫子には表情豊

かである。好きなものはないが、長話は超がつくほど嫌い。真面目な話のときには長話でも聞いているが、本人に直接関係があっても、興味のないものには途中から明後日の方向を向くようになる。それでも、完全記憶能力を持つことから話の内容をすべて頭の中に記憶しているため、急に詰め寄られてもなんの支障もなく返答する。

女性に弱く、女性からの頼みであれば何でもOKしてしまう。そのたびに、撫子から睨まれたり、制裁を加えられる。

外見は高身長でやや細身だが筋肉質（ボディービルダー程ではない）、顔は上の中ぐらい。

国際IS委員会より織斑 一夏の監視、及び必要な場合の護衛をするよう言い渡され、IS学園に転入することになった。外見的に厳しいところがあるが、織斑 一夏のいるクラスに転入する予定。年齢は詐称して転入する。

名前 カタギリ 片桐 ナデシコ 撫子

年齢 17歳

階級 中佐

専用IS ケルディム

国際IS委員会直轄の非公開組織「ソレスタル・ビーイング」所属。第1小隊隊長。

大和の後ろを1歩半下がってついて行く。

大和のよき理解者でありパートナー。大和が唯一背中を預けている人。大和が「ソレスタル・ビーイング」に所属する少し前に旅先で侵入した研究所で、廃棄されそうだったところを拾われた。大和程ではないが常人からすれば高い身体能力を持っている。射撃の腕は大和を超えるところがある。冷静沈着だが、怒らせると大和以外では止めることができない。

ISの操作のためだけに作られたデザインベビーの一人。そのため体を遺伝子レベルで強化されている。実験個体であったため他のデザインベビーと異なり感情を持つている。それが原因で廃棄されそうになったところを大和に救われた。以降大和について行っている。大和に救われた際に「撫子」という名を貰うが、後に姓がないことに気づき、取りあえず「片桐」にしたところ現在に至る。

意外なことに家事は得意。

朝が極めて弱い。同じく朝が弱い大和とともに、まとめ買いしておいたパンを食べてクラスに出向いている。

IS学園の購買部から週に一度パンがなくなるのは彼らが原因である。

好きなものはないが、嫌いなものは勉強。頭で理解するよりも、体で覚えるほうが得意と自負している。しかし、IS学園の試験では成績上位者に入っているのはここだけの話。

外見は細身だが出るとこは出て、引っ込むところは引っ込むという完璧なライン。その容姿により実年齢より高くみられるのが悩み。

国際IS委員会より織斑 一夏の監視、及び必要な場合の護衛をするよう言い渡された大和により指名され、大和とともにIS学園に転入することになった。外見的に厳しいところがあるが、織斑 一夏のいるクラスに転入する予定。年齢は詐称して転入する。

オリジナルIS

機体名 ヴァーチェ

製作者 片桐 大和

操縦者 片桐 大和
世代 分類不可
タイプ 拠点攻略型

国際IS委員会に目をつけられる原因になった機体。

擬似ISコアを搭載した機体。委員会では擬似ISと呼称されている。

ヴァーチエには半永久機関であるGNドライブが3基搭載されている（背部と、両肩のGNシールド内）。半永久的にエネルギーを生み出すためエネルギー切れの心配はない。模擬戦などでは、一定量プールしておいたGN粒子がなくなった時点で負けとなるリミッターが設けてある。

拠点攻略型の示すとおり対ISよりもIS関連施設、武装集団の拠点の攻略を目的とした機体。自己進化能力がないためオーバースペックではないかというほどの、火力と防御力を最初から与えられている。全身装甲タイプで重厚な機体だが、スピードは第3世代と変わらない。

外見はガンダム00のヴァーチエ。ただし、両肩はGNキャノンではなくクアンタのGNシールドになっている。待機形態は緑色のブレスレット。待機形態でもヴァーチエに搭載された各種センサーは作動している。その情報は脳量子波を通して必要に応じ、大和へ送られている。

装備

GNバズーカII 2本

主武装、片手に1本ずつ持つ。連射性能が低いいため片方ずつ用いる。

フルパワーで同時に使用した場合、IS学園を半壊させるためリミッターをかけている。普段は量子化して格納されている。

GNシールド 2枚

内部にGNドライブを1基内蔵する、表面をGN粒子でコーティングしたシールド。背中のアームから各肩に1枚ずつ連結されている。アームの自由度は高く、腕の動きを妨げることはない。上部には威力を重視したGNビームガンが1門、下部には連射性を重視したGNビームマシンガンが2門用意されている。

GNビームサーベル 6本

両前腕部に3本ずつ格納されている。接近戦はあまり想定されていないので唯一の近接戦闘用武器。ビームサーベルの長さは自由に換えられる。通常は機体からGN粒子を供給しているが、機体からの粒子供給が絶たれても内蔵されているGNコンデンサーにより一定時間形状を保つことができる。

GNフィールド

機体全体を包み込むようGN粒子を球状に展開したもの。消費する粒子量が多いが、圧倒的な防御力をもつ。理論上、既存の武器では突破できないのだが、シールド無効化攻撃は防げない。また、高圧縮のGN粒子による攻撃や、表面をGN粒子でコーティングしたのも防ぎきれない。ISのシールドバリアの代用になっている。

トランザムシステム

機体内部に蓄積されていた高濃度圧縮粒子を全面開放することで機体スペックを一時的に3倍以上に上げるシステム。一定時間を経過すると著しい機体スペックの低下に見舞われるため、限界時間到達直前に機体から警告が出る。限界時間到達前に解除すれば著しいスペック低下は避けれるが、ある程度のスペック低下は免れない諸刃

の剣である。任意での途中解除も可能。

追加装備

GNフルバーニア 2基

背部に取り付けられる2基1対の大型GNバーニア。

単独での大気圏離脱を想定して設計されており、粒子貯蔵効率を高めた大型GNコンデンサーが内蔵されている。貯蔵されている粒子量はかなり多く、第二宇宙速度で最大1時間航行可能なほど。

先端にGNキャノンが内蔵されているが、粒子の消費が激しい。GNキャノンを使用するには第二宇宙速度での移動を中止し、腰から前方に構える必要がある。

GNフルバーニアの外見はガンダム00のハルートのGNキャノン（ただし、色は黒みがかったグレー）。

機体名	ケルベロス
作者	片桐 大和
操縦者	片桐 大和
世代	分類不可
タイプ	全局面对応型

ヴァーチェの中に秘匿されている全身装甲タイプの機体。背部のGNドライブ、双肩に取り付けてあるGNシールドのGNドライブ、計3基を同調させることで粒子生成量を3乗化する「ケルベロスシステム」を搭載した機体。

ケルベロスシステムはこの機体が現れたときにのみ作動する。粒子生成量が向上したことにより火力は格段に向上している。装甲が薄くなったため防御は若干下がったものの、GNフィールドはより強固になっている。スピードは飛躍的に向上しており、白式の瞬間加速と同程度の速度をコンスタントに出せる。

しかし、搭載されているGNドライブが本来同調させて使用することを前提としていなかったため、同調率が低く安定稼動しない。そのため、現在は使用できない。

外見はガンダム00のダブルオークアンタ。ただし、GNシールドは両肩に1枚ずつついている。

装備

GNソードV 2本

本機の主兵装。ケルベロスが出てきたときのみに使用可能。通常は量子化されている。刀身全体をクリアグリーンの半透明素材で形成している。ソードモードとライフルモードに変形することができる。ソードモードではGNフィールド、シールドバリアを突破して攻撃することが可能。ライフルの出力は調整が可能で、最大出力では数発で相手のシールドエネルギー残量をゼロにできる。GNソードピット6基を刀身に合体させることで、ソードモードはバスターソード、ライフルモードはバスターライフルへと強化できる。バスターライフル時にトランザムを発動すれば全長数kmにもなるビームサーベルを使うことができるが、これを使うと強制的にトランザムは解除される。

GNシールド 2枚

内部にGNドライブを1基内蔵する、表面をGN粒子でコーティングしたシールド。背中のアームから各肩に1枚ずつ連結されている。アームの自由度は高く、腕の動きを妨げることはない。上部には威力を重視したGNビームガンが1門、下部には連射性を重視したGNビームマシンガンが2門用意されている。GNソードピットのキヤリアも兼ねている。ちなみに、GNソードピットはヴァーチェでは使用できない。

GNソードピット 合計12基

GNシールドにマウントされている。GNシールド1枚に対し形状と大きさの異なる3種類のピットがそれぞれ2基ずつマウントされている。GNソードVと同素材の刃が採用されている。ピット表面をGN粒子でコーティングしているため、そのまま突撃させ機体にダメージを与えることもできるが、先端から粒子ビームを照射し攻撃することが多い。6基のソードピットを円環状に配置することで、任意の範囲にGNフィールドを展開できる。

GNビームサーベル 2本

腰背部に装備されている。ヴァーチェの時でも使えるがあくまで予備的な物。ケルベロス時ではヴァーチェのそれを上回る出力が出る。

GNフィールド

ヴァーチェのそれよりもより強固なものを展開できるが、弱点は変わっていない。

ヴァーチェ

パージされた装甲はヴァーチェの形に再度組み直され、GNコンデンサーに貯蔵されている粒子が許す限り脳量子波によって遠隔操作することができ、GNドライブを内蔵していないため火力、防御、スピードが下がっているものの第3世代ISを複数相手にしても善戦できる。粒子が尽きると量子化される。

トランザムシステム

本来粒子生成能力が高い本機体では、粒子生産量が通常の10倍以上になるため機体スペックを最大で9倍にすることができる。ただし、欠点は変わらず諸刃の剣であることには変わらない。任意での途中解除も可能。

機体名 ケルディム（第1形態）
設計者 片桐 大和（一部作成）
操縦者 片桐 撫子
世代 第4世代
タイプ 中遠距離射撃型

大和が「ソレスタル・ビーイング」の隊長機として設計した機体の1つ。擬似GNドライブを1基搭載している。組み立てはソレスタル・ビーイングの技術者によるものだが、擬似GNドライブの作成は大和が行った（もともと大和しか作れない）。純粹には第3世代相当の機体だが、擬似GNドライブを搭載したことにより一応第4世代ということになっている。

擬似GNドライブの補助により燃費は格段にいいが、擬似GNドライブがなければ他の第3世代ISよりも燃費は悪い。PICに加えGN粒子も移動に用いるため、既存の第3世代ISよりも速い。精密射撃モードでは照準用フォロスクリーンが頭部前面に展開され、ハイパーセンサーの補助を行う。

一部のパーツ、装甲はヴァーチエ、ケルベロスと同じ材質のものが使われているため、防御力は既存のISよりも高い。

オリジナルのGNドライブと異なり擬似GNドライブは粒子生産量が限られるため、GN粒子を大量に消費する武装はあまりつけられていない。

また、この機体は擬似ISではない。

外見はガンダム00のケルディム。全身装甲タイプではなく他のISと同じで、必要な部位のみに装甲を展開している。頭部にはV字のアンテナではなくブルー・ティアーズのヘッドギアの緑バージ

ヨンがついてる。待機形態は赤色のブレスレット。

装備

GNスナイパーライフルII

遠距離からの精密射撃を行う際に用いる。銃身を折りたたむことで、3連バルカンモードに変形する。普段は右肩にマウントされている。

GNシールドピット

遠距離操作が可能なGNシールド。ヴァーチェやケルベロスの装甲と同じものを用いているため、高い防御力を誇る。自由に分散、密集できるので多方向からの攻撃を防ぐことができる。各ピットにはビーム砲が装備されていて、左肩に2基、両膝に2基、擬似GNドライブに5基の計9基が装備されている。

GNビームサーベル

ヴァーチェと同型の物。それ以上でも以下でもない。腰背部に2本装備されている。唯一の近接武装。

連装ショットガン 2丁

実弾のショットガン。撫子自身、遠距離からの精密射撃が得意なためあまり使うことはない。

アサルトライフル 2丁

実弾のライフル。接近する相手を牽制する目的で使用される。形状はFN F2000。

ミサイルポッド

腰部アーマーに内蔵されているが、あまり使うことはない。

超遠距離決戦用電磁砲 トール

ハイパーセンサーの探知圏外から打ち込む一撃必殺のレールガン。シールドエネルギーのすべてを用いて使用するため、単機での使用は自殺行為に等しい。トランザム中のみ使用することが可能。

トランザムシステム

機体内部に蓄積されていた高濃度圧縮粒子を全面開放することで機体スペックを向上するシステム。本機にいたっては精密射撃の補助演算、ハイパーセンサーのスペックアップに寄与している。擬似GNドライブで限界時間までトランザムを使用すると、ドライブが焼き切れるので限界時間直前に強制解除される。強制解除された場合、機体性能は極端に低下し、外部からドライブにエネルギーを与えない限りスペックダウンは回復しない。任意での途中解除も可能。

単一仕様能力

不明

用語

ソレスタル・ビーイング

国際IS委員会直轄の非公開組織。非公開組織だが巷では都市伝説の1つとして数えられている。擬似ISを製造した片桐 大和を管理、監視下に置くために組織されたが、現在はIS関連の事件、事故を速やかに処理する委員会の実働部隊になっている。ミッションの1つとして篠ノ之 束博士の保護、監視下に置くというものがあるが、達成されていない。委員会が管理している組織では唯一、亡国機業に対抗出来る。

脳量子波

一部の人間が扱うことができる脳波の一種。全ての人が潜在的に持っているが、脳量子波レベルが高い人、自在に操れる人は稀である。脳量子波レベル、身体能力が高い人間を「イノベーター」とソレスタル・ビーイング内では呼んでいる。

脳量子波は自分の思考を相手に送ったり、相手の思考を読むといったことから、三次元リーダーのように用いることもできる。

ヴェーダ

片桐 大和が擬似ISを製造する前に作った量子演算システム。どこに置かれているか不明であるが、ソレスタル・ビーイングの活動にはなくてはならないものである。「白騎士事件」の混乱に紛れ世界中の情報システムにアクセスできるようになったため、世界中のあらゆる情報が集まっている。情報は重要度ごとにレベル分けされ蓄積されており、レベルごとに閲覧できる人間が制限される。全レベルを自由に閲覧できるのは製作者である片桐 大和のみである。

片桐 大和は自身の脳量子波を用いてヴェーダとリアルタイムにリンクしているため、最新の情報が常に送られてくる。ちなみに、常人が同じことをすれば、接続した瞬間に脳細胞が全滅してしまうほどの過負荷である。

擬似IS

片桐 大和が作成したISに対抗出来るISではないもの。ISではないとしながらも根幹をなす技術の一部はISを基礎にしている。既存のISと異なり自己進化能力やシールドバリア、PIC、単一フ・アビリティ^{ワンオ}仕様能力は存在しない。絶対防御は異なるシステムを用いて再現している。

ISではないので男性でも扱えるが、ISを作成するほうが格段に効率がいいため量産される予定はない。

擬似ISコア

ISのコアのブラックボックスを解析した結果から作られたコア。オリジナルのコアとは似て非なるものである。コアを解析した結果再現できた機能としてはコア・ネットワークぐらいで、その他の技術は解析できても再現できなかった。

GNドライブ

太陽炉ともいう。片桐 大和が作成した無限にGN粒子とエネルギーを生成する半永久機関。待機中も一定量のGN粒子とエネルギーを生み出し続けている。その基礎理論は科学者だった両親が残した物である。放出する粒子の色は淡い緑色で、攻撃用に高濃度圧縮したものはピンク色である。製造方法は片桐 大和しか知らず、篠ノ之 束でも解析できなかった代物である。

擬似GNドライブ

オリジナルのGNドライブに比べ格段に製造しやすくしたもの。擬似太陽炉ともいう。製造しやすさを重視したため、半永久機関ではなくなったが、性能面では同じ。ただし、トランザムを限界時間まで使用すると焼き切れてしまう。始動には外部からのエネルギー供給が必要であり、供給されたエネルギー量に比例して活動時間が伸びる。

初期型は真紅の粒子を放出し、攻撃用に高濃度圧縮したものも真紅だった。改良型は赤みを帯びたオレンジ色で、攻撃用に高濃度圧縮したものはオレンジ色である。初期型は高濃度圧縮すると生体に毒性を示すが、改良型は高濃度圧縮しても生体に毒性を示さない。初期型は委員会によりすべて破壊、処分されたことになっている。ちなみに、毒性を指摘したのは篠ノ之 束である。

GNコンデンサー

GN粒子を貯蔵するための装置。太陽炉から常に生産されている余剰のGN粒子を貯蔵している。オリジナル、擬似問わず太陽炉を持

つ機体は必ず装備している。特に、ヴァーチェの装甲には随所に取り付けられている。

GN粒子

GNドライブから生成される粒子であるが、自然界にも少なからず存在している。

周囲に散布すれば既存のレーダーや通信機器などを麻痺させることができる。ただし、コア・ネットワークによる通信は麻痺させることができない。その他にも、重量軽減効果やGN粒子でコーティングすることにより、強度を向上させることができるなど状態によって様々な効果を発揮する。GN粒子は片桐 大和の両親によって発見されるが、二人によって公表されることはなかった。

ライセンス

国際IS委員会より発行されるライセンスを持つ者たちを総称してライセンスと呼ぶ。

ライセンスにはレベル1とレベル2の2種類があり、それぞれ行動の制限が異なる。

レベル1はISに関わるあらゆる施設、エリアに自由に立ち入ることができ、ISに関わる情報を無制限で閲覧することができる。また、自身のISを良心の範囲内で、正当な理由のもと自由に使用することができる。

レベル2はISに関わる制限施設、制限エリア及び高度制限施設、高度制限エリアにその最高責任者もしくはそれに準ずる者からの許可があれば自由に立ち入ることができる。また、ISに関わる情報はそれを管理する者の許可があれば自由に閲覧することができる。

近年は発行されることがないため、半ば都市伝説化している。

設定（後書き）

主人公がチート状態ですね。

これ、大丈夫かな？

感想、御指摘、誤字脱字などがありましたらコメントして下さい。

訳あり転入生（前書き）

なかなか話が進みませんね。
しかも文才が無いため酷い出来です（汗

訳あり転入生

数日後・・・

時計が午前8時を指す少し前。

「ここですか？」

「そうだ、今回のターゲットはここにいる。」

「初めて来ましたが、ずいぶん広いですね。」

「話には聞いていたが、広いな・・・。」

入学式も終わり、落ち着き始めたIS学園の門の前に二人の人間が立っている。

一人は男性、もう一人は女性だ。

「そろそろ約束の時間なのだが・・・。」

男性が時計も見ずに呟くと。

「あの人ではありませんか？」

となりの女性が近づいてくる人物に視線を移す。

「すまない、待たせたな。」

近づいてきたスーツのよく似合う女性が二人に声を掛ける。

「お久しぶりです。織斑さん。」

「ここでは織斑先生とよんでもらおうか、大和。」

ニヤリと笑いながら返事をしたこの女性、IS学園の教員であり第一回IS世界大会総合優勝者でもある『織斑 千冬』だ。

「ところで、となりの女性は誰だ？」

視線を大和と呼んだ男性から、となりの女性に移しながら尋ねる。

「片桐 撫子です。撫子とお呼び下さい。本日付けでIS学園に配属されることになりました。」

片桐 撫子と名乗った女性は丁寧にお辞儀した。
互いの紹介も終わり、千冬は二人を職員室へ案内した。

「ほんとに久しぶりだな大和、何年ぶりだ？」

「確か、5年ぶりだと思います。」

職員室の来客用の椅子に座った二人に千冬は話し掛けた。

「もうそんなになるか……。5年間も連絡一つよこさず何してたんだ？」

「いろいろあったのですが、それは別の機会に。」

返答をはぐらかす大和。撫子が『空気』になり始めたので大和が本題に移る。

「まず、こちらを御覧ください。」

そついい、大和は封筒を千冬に渡す。
渡された封筒の中身、数枚の書類に目を通すうち千冬の顔色が陰し

くなってきた。

「どういうことだ？」

「その書類のとおりです。学園の理事会も承認済みです。」

一通書類に目を通した千冬が目線だけ大和に向け尋ねる。大和もさも当然のような顔で千冬に返答する。

「我々がここに転校する理由は、あなたの弟さんである織斑 一夏の監視と必要最低限の護衛です。」

「・・・・・・・・・・。」

「撫子。説明を。」

無言で大和を睨む千冬。顔色一つ変えない大和は詳細を撫子に説明するよう促す。

「現在、ISを動かすことができる男性はあなたの弟である織斑 一夏くんだけです。当然、各国から注目されますし、彼らから狙われる可能性もあります。」

ファントム・タスク
「『亡国機業』か・・・・。」

背もたれに寄りかかりながら目を閉じ、独り言のように口を開く。

「はい。最近、彼らの動きが活発化しているようで、委員会も念には念をということでわたし達を派遣しました。」

「IS^{（イ）}学園に転入するということはお前もISを動かせるんじゃないのか？」

相変わらず背もたれに寄りかかり、目を閉じ腕を組んでいた千冬が片目だけ開き大和を見る。

「私のISはISであってISではないですから。」

「・・・どうということだ？」

「機密事項です。」

両目を開き、身を乗り出して来た千冬へ間髪入れず答える大和。
撫子が続ける。

「お伝えし遅れましたが、わたし達はライセンサーになります。」

2枚のカードを提示する。一枚は大和のもの、もう一枚は撫子のも
のだ。

「・・・ライセンスか、久しぶりに見たな。大和がレベル1で撫子
がレベル2か・・・。」

提示されたカードを見ながら、千冬がやや面度そうな顔をする。

「『ソレスタル・ビーイング』といい『ライセンス』といい、都市
伝説がこつも目の前に揃うとわな。」

千冬は苦笑いしながら提示されたカードライセンスを撫子に返した。

彼らが所属する組織、『ソレスタル・ビーイング』は国際IS委員会
直轄の非公開組織なのだが、巷では都市伝説として語られている
ものである。そして、同じくライセンスも。

「事情は把握した。このことを他の教員には？」

「他言無用でお願いします。他の教員へ説明が必要になった際は我
々から伝えさせていただきます。」

「一夏も男だ。自分の身ぐらい自分で守るべきではないのか？」

「もちろん。彼の手におえるものだ判断した場合、我々は手を出しませんよ。」

そうか、と返答した千冬はクラスへ案内すると言って、二人について来るよう促した。

訳あり転入生（後書き）

いかがだったでしょうか？

頑張っではいるんですが、なかなか上手く書けませんね。

感想、御指摘、誤字脱字などがありましたらコメントして下さい。

訳あり転入生2（前書き）

キャラの呼び方がなかなか統一できない（汗
いつかは統一したいと思います。

訳あり転入生2

その日、織斑　一夏は朝から頭を抱えていた。

（結局、第との練習は剣道だけだったな・・・。）

クラス代表を決める決闘（対戦相手曰く）を放課後に控え、起きた時からずっとこの調子である。

（ISにまったく触れてこなかったけどだいじょうなのか？）

自分でも驚くほどの深い溜息をしながら、織斑　一夏は自分の席に座っていた。

「ここで待っていてくれ。」

そう言い残しSHRを始めるために織斑　千冬は教室に入っていた。

「確認するぞ、撫子。」

「はい、准将。」

准将と呼ばれた瞬間、短い溜息をついた大和。

「少なくとも『IS¹¹¹学園』にいる間は『大和』と呼べといっただろうー！」

と、何度目かわからない注意をしながら呆れ顔している。

「申し訳ありません、ヤマト。つい癖で……。」

少し不貞腐れた顔で返答した撫子に、少しは気をつけてくれと言いながら溜息をついた大和であった。

「今日は転入生がきまゝすー！」

と、ここで学んでいる学生とあまり変わらない容姿（唯一異なるのは胸の大きさぐらいだろう）の山田先生が元気にしゃべりだした。朝からご苦労なことである。

「しかも二人です！！では早速入ってきてもらいましょう！！！」

転入生が二人来ると聞き、（出来れば一人ぐらいは男子がいいな）などと考えながら、織斑 一夏は肘をつきながら教卓の方を眺めていた。彼にとっては目の前の転入生より今日の決闘の方が重要なため、心ここにあらずといった状態であった。

「男子よ男子!!」

「二人目の男の子!!」

「織斑くんと違ってお兄様系の人!!」

大音量の悲鳴の後に口々に感想を言い合う花の十代達。

「大人気ですね。」

ジト目で大和をみる撫子。視線に気づきポーカーフェイスで「何かいいました?」という顔をしながら撫子の方を見る大和。

「別に。」

といいながら視線を戻す撫子。

「それに、となりの女の子も何か、お姉様系で美人じゃない?」

「そうそう、二人並ぶと何か絵になるわよね。」

クラスの女子達は今度は撫子の方に興味を示す。

一夏少年も撫子の方をみて、呆けている。

口をポカンと開けて、マヌケ面を絵に書いたような顔である。

そんな顔をしているので、篠ノ之 箒は一夏を睨んでいるのだが、彼が知る由もない。

ちなみに、撫子に対する感想のほうが多かった。

『人気者だな。』

『嫉妬ですか?』

脳量子波でそんな会話をしていたとき、我らが担任、織斑先生が一喝!!

「五月蠅いぞ！！貴様ら！！」

事前に「何かする」ということを察知できた大和と撫子でも驚いたので、他のクラスメイト達はもつと驚いただろう。
一瞬で静かになった。

「自己紹介をしてもらおうか。」

と言い、顎で合図する織斑先生。

「片桐 かたぎり 大和 やまと だ。急な転入だが、これから１年間よろしく頼む。」

威風堂々と自己紹介する大和。

「片桐 かたぎり 撫子 なでしこ です。転入したてなので、よくわからないことだらけです。足をひっぱるかもしれませんが、よろしく願いします。」

最後に御辞儀し紹介を終わる撫子。

（おいおい、ほんとに男子が転入してきたよ。）

織斑 一夏は驚きを隠せなかった。

自分に仲間ができたようで嬉しい半分、クラス代表が変わってくるかもという下心半分それが彼の現在の心境である。

だが、そんな幻想が殺されるのはもう少し後のことである。

（それにして、となりの子はすごい美人だな。ホントに同い年か？）

一夏少年には珍しく鋭い勘である。そして、その勘は正しい。

大和も撫子もこのクラスの子達よりも年上である。もちろん、年齢は詐称して転入してきているし、織斑先生もそのことは知っている。しかし、一夏少年、その勘がもう少し別のところで鋭くなってほしいものだ。

時は休憩時間。

自己紹介の後、

「お前達の席は窓際の一番後ろだ。」

と織斑先生より指示され。彼らは自分達の席に座っている。ちなみに、一番後ろが撫子でその前に大和が座っている。

「なんで二人とも同じ苗字なの？」

「双子？」

そんな質問が一番多かった。

当然の疑問であり、二人とも予想の範囲内だった。

「たまたま苗字が同じなだけだ（です）。」

二人ともこの一点張りだった。

「怪しい」と思うのが年頃の女の子特有の勘だ。

もちろん、二人の苗字が同じであるのは深い理由があるのだが、それはまた別のお話。

「ちょっとゴメン！」

人垣をかき分けてやってきたのが、織斑 一夏だ。

脳量子波で彼が近づいてくるのはわかっていたため、特に驚くこともなかった。

というか、ホント便利だな脳量子波。

「君は確か……。」

ニュースで何度も名前を聞いているし、今回のターゲットでもあるため知っているのだが、お互い自己紹介をしていないため、不信感を与えないよう言葉を選んだ大和。

「織斑 一夏だ。一夏ってよんでくれ。」

「そうか、君が……。片桐 大和だ。好きによんでくれて構わない。」

「それで……。ええつと。」

一夏が後ろの席の撫子の方に視線を移す。

「片桐 撫子です。撫子とよんでください。」

と言った後、彼女は少し微笑んだ、その時周囲にいた人間が男女問わず頬を赤くした（大和を除く）のはここだけの話。

「ああ、そうだ!!」

我に返った一夏が訪ねてきた目的を思い出した。

「今日の放課後にイギリスの代表候補生と戦わないといけないんだけど・・・。」

「そうか、頑張りたまえ。」

「いや、そうじゃなくて!!」

丸め込まれそうになったため、必死に喰らいつく一夏。

彼のダダ漏れの思考を読み取り、必死にお引き取り願おうとする大和。

「大和もどうかなと思って・・・。」

「応援にか？」

「違う!!」

このやりとり中、大和は一切表情を崩していない。完全にポーカーフェイスである。

というか、クラスに入ってから一度も崩していない。このやりとりの後、「ミスター・ポーカーフェイス」という異名を授かったのは言うまでもない。

「わたくしが怖いのですか？」

「セシリア・オルコット・・・。」

「何で知ってるんだ？大和？」

「君はさつき、イギリスの代表候補生と戦うと言っていただろう。それに、君と彼女が戦うのは他のクラスメイトからも聞いた。」

代表候補生

簡単に言えばエリート。

しかし、自分で自分のことをエリートって言うといタイ以外のなものでもない。

「わたくしのようなエリートと戦うのが怖いんでしょう？」

（言っちゃったよ。イタイ子決定だな。）

そんな事を思いながら、大和は一夏に話しかける。

「え？何？もしかして織斑君はビビってるの？」

「いや、別に……。」

一夏の視線が左下を泳ぐ。

（少し動揺したな……、まあ半分正解といったところか……。）

「あなたにも、言っているのですよ！？」

「私か？」

自分の方に指をさされ、大和はオルコットの方に視線を移す。

「そうです！！だい……。」

「悪いが、時間切れだ。」

オルコットの言葉を遮り、大和が言い終わった瞬間、予鈴が鳴った。物足りなさそうな顔をしながらオルコットは自らの席に戻った。

オルコット
(あの子も大変だったみたいだが、これはやり過ぎだな……。)

脳量子波でヴェーダからセシリア・オルコットの情報を呼び出し、彼女の経歴を見た大和は窓の外を眺めながら思った。

プライバシーの侵害なのは分かっているのだが、証拠は彼の頭の中にしかないため特に気にしていない。

(努力は認めるが、ここまで高圧的にならなくても……。)

未だに窓の外を眺めている大和へ織斑先生が声を掛けた。

「大和、自分の状況が分かっているのか？」

「白いチョークが私の方に飛んできています。」

言い終わる前に、チョークを人差し指と中指で挟んで受け止めた大和。

そこで、初めて教壇に立つ織斑先生の方を向く。

クラス全員が呆気にとられている中、織斑先生が舌打ちをしたのを教壇のすぐ近くに座っていた一夏は聞いた。

「まあ、いい。大和！今説明したことを簡潔にまとめろ！！」

織斑先生の声が教室に響いた。

時間は変わって放課後。

ちなみに、織斑先生に当てられた大和は先生を唸らせる回答をした。そのため、織斑先生は絶賛不機嫌である。

決闘（オルコット曰く）が始まる寸前に一夏の専用機「白式」^{ひまぐし}が届いた。

一夏は箒に激励され、織斑先生にはやや投げやりに送り出されていた。った。

それを、少し離れたところから大和と撫子は見ていた。自らの弟を送り出し織斑先生はシレッと言った。

「この後、大和にも戦ってもらうからな。」

「はい？」

「返事はハッキリ言え！！」

そう言いながら織斑先生は出席簿を大和に向けて投げた。

訳あり転入生2（後書き）

今回もまだまだですね。だいぶマシになってきたとは思いますが・・。

感想、御指摘、誤字脱字などがありましたらコメントして下さい。

一夏 対 オルコット、そして・・・（前書き）

通算 1,000 ユニークを超えました!!

こんな駄文ですが、読んでいただきありがとうございます!!

一夏 対 オルコット、そして・・・

モニタールーム

先程出席簿が当たった部分がまだ痛いのか、当たった部分をさすりながら二人の戦いを観ている大和。

少し機嫌をよくした織斑先生は腕を組んで戦いの行く末を見守っている。

ファースト・シフト

（一次移行してない割には、善戦しているな。）

大和が、オルコットの遠隔操作兵器「ブルー・ティアーズ」を「白式」唯一の武器である「雪片式型」で撃ち落とすのを見て思った。

ファースト・シフト

一次移行

ISでも専用機と呼ばれる機体で起こる現象である。

フォーマット フィットテイング

初期化と最適化を行うことで、専用機としての性能を発揮できるようになる。

「血は争えないか・・・。」

独り言をいい織斑先生の方をちらりと見る大和。

箒は織斑先生の隣で固唾を吞んで見守っている。

目線を画面に戻す大和。

フォーマット

フィットテイング

（初期化と最適化が終わるのが早いのか、決着がつくのが早いのか・・・。）

大和はヴェーダを使い今回の戦いをシュミレートしながら思った。

結果は、このままであれば一夏の負けは確実、フォーマット 初期化と最適化つまり
ファースト・シフト 一次移行が先に終われば五分五分だった。

（さて、どうなるかな・・・。）

場所と時間は変わってピット

「威勢よく出ていったのになー!!」

「ま、こんなものだろ。」

「いや、頑張ったと思うよ。」

「・・・・・・・・・・。」

幕引きは呆気なかった。

ファースト・シフト

白式の一次移行が予定より早く終わった、そこまではよかったのだ。しかし、一夏が武器の特性を理解していなかったため、自身のシールドエネルギーを全て使いきり、負けてしまったのだ。

因みに、上から箒、千冬、大和、撫子の順である。

「面目次第も御座いません……。はあ、いたわってくれるのは大和だけだよ……。」

一夏は意気消沈し、半泣き状態である。

畳み掛けるように山田先生がISの運用に関する本を持ってきた、

手渡された一夏は歩く屍になったのは言うまでもない。

「今度は大和の番だ!!」

ドサクサに紛れてピットから出て行こうとした大和に釘を刺した。

「いや、今日は調子が悪いというか・・・、オルコットさんも休まないと・・・。だいたい、「ブルー・ティアーズ」も失ってるし。」
「オルコット、行けるか？」

「は、はい、わたくしは問題ありませんわ。ですが、その方が言われるように「ブルー・ティアーズ」が・・・。」

「心配するな。予備をお前のピットに用意しておいた。補給しておけ!!」

――ということで、1時間後に開始ということになりました。――

（なんで、こう用意がいいんだ？）

不満に思いながらも、顔に一切出さない大和のところへ一夏と箒がやって来た。

「急に試合になったけど大丈夫か？大和？」

「大丈夫だ、問題ない。」

「というか、お前も専用機なのだな、大和。」

一夏の試合が始まる前、大和と撫子は篠ノ之 箒と自己紹介をしている。

大和は箒の方を見ながら口を開いた。

「ああ、確かに専用機だが、これをISと呼んでいいかは、
・・・
・・疑問だな。」

「どついう事だよ？」

「ヤマト。」

一夏が食いついてきたので、撫子が目で大和を注意する。

「すまない、そろそろ準備をしたいので。」

そう言つて一夏と箒に背を向けた。

「俺の仇をとつてくれよ!!」

「勝つてこい!!」

一夏と箒は思い思いの激励を大和に送った。

「ああ、勝つてくるさ、それから篠ノ之さん、それは負けた人間にも言つてたよね?」

それは、負けフラグでは?

という意味の言葉を箒に言いながら、大和は振り向いて二人にハニカんだ。

それは、IS学園に来て初めて撫子以外に見せた表情だった。

「ヤマト。」

「分かっている。ヴァーチェはリミッターモードで使う。それと、オペレーターは君に任せたぞ？」

「わかってます。御武運を。」

危うく敬礼しそうになった撫子は、モニタールームへ小走りに向かった。

「さて、そろそろ行こうか。ヴァーチェ、リミッターモードで展開。」

左腕の緑色のブレスレットから淡い緑の粒子が放出され大和を包んだ。

それは一瞬で、すぐさま粒子は消え、そこには1機のISが立っていた。

「そ、それが大和のISか？」

一夏が声を掛けた。

「ああ、機体名は『ヴァーチェ』だ。」

篤は呆気にとられ口をポカンと開けている。

（GNドライブリポウズ解除、脳量子波コントロール、ヴェーダとのリンク、コア・ネットワーク問題なし……。行ける。）

一人システムの確認をしている大和にプライベート・チャネルで連絡が来た。

《ヤマト、GN粒子の散布を中止してください。アリーナの電子機

器にエラーがおきています。》

《！撫子か。すまない、つい癖だな。》

大和はGN粒子の散布を中止し、撫子にエラーから回復したか連絡、エラーがなくなったことを確認したあと、カタパルトにヴァーチエをセットしピットから勢い良くアリーナへ出て行った。

時間は少し戻って、モニタールーム。

山田先生こと山田 真耶はモニター室にあるキーボードの前に座ってスタンバイ。

我らが担任、織斑先生は山田先生の後ろで腕を組んで立ち、モニターを眺めている。

「織斑先生。」

「何だ？」

「なぜ今日転入してきたばかりの片桐くんをセシリアさんと戦わせるんですか？」

「気になるか？」

「それは、まあ。男性のIS操縦者は織斑くん以外では『全く』二ユースにありませんでしたし。あれだけ有名だった織斑くんですら、今日を含めて2回しかISを触ってないんですよ？無名だった片桐くんが織斑くんよりISを触っているとは考えられないんですけど・・・。」

「そうかもしれん。しかし、大和は専用機持ちだ。どこかで動かし
ている可能性もあるだろう？それに……。」「
それに何ですか？織斑先生？」

それ以降、千冬は沈黙していた。

織斑 千冬と篠ノ之 束たはねは片桐 大和と旧知の仲だ。

二人は片桐夫婦の一人息子である大和を、彼が小さい頃から見てい
る。

織斑 千冬と篠ノ之 束は片桐の両親のいる研究所によく出入りし
ていたし、片桐夫婦の家にも遊びに行っていた。

大和の才能は彼が赤ん坊の頃から開花していた。

片桐夫婦によれば、大和は誰よりも早く立ち上がり、誰よりも早く
言葉を理解し、話していたそうだ。

はじめは親ばかりかと思っただが、研究所の他の人達も同じことを言っ
ていた。

それを聞き、さすがの束も驚いていた。

小学校に入る頃には高校の内容はもちろん、大学で学ぶような知識、
技術も身につけはじめていた。

しかし、片桐 大和に人生の転機が訪れる。

篠ノ之 束がISを発表し、行方をくらませた（現在も絶賛行方不
明なのだ）。

その数カ月後、片桐夫婦が務めていた研究所は閉鎖、片桐夫婦も行
方不明になった。

以降、大和は遠縁の親戚や施設を点々としていた。

その間も千冬や束（束はホントに時々だが）とは連絡をとりあっ
ていたが、5年ぐらい前から大和と全く連絡が取れなくなった。

それを堺に、「片桐 大和」に関わる全ての個人情報が消されていた。

奇しくも、千冬が最後に連絡をとったのは5年前の今日である。

（どういつ縁なのだろうな・・・。）

千冬はピットで撫子や一夏、箒と準備している大和をモニター越しに見ながら思った。

そして、千冬は直感的に感じていた、「片桐 大和」という少年（正確には青年に近いが）には何か裏に大きなものが隠れていると。

そんな事を考えていると、モニター室に撫子が入ってきた。そして、山田先生の方へ近づいていく。

「どうした？大和の方を手伝わないのか？」

千冬は自身の横を通り過ぎていく撫子へ、顔だけ向けて話しかけた。

「ヤマトを手伝うためにここへ来たんです。山田先生、変わってください。」

千冬に言葉を返しながら、山田先生に席を譲ってもらう撫子。

山田先生は「え？え？」と言いながらおろおろしていた。

撫子と山田先生が席を変わったちょうどその時、モニターが光った。大和がISを展開したのだ。

千冬と山田先生は瞬間的にモニターの方に振り向くが、すぐに映像がダウンしてしまった。

映像だけではなく、リーダー、通信機器もダウンしている。

「ど、どうなってるんですかあ〜？」

「・・・私にもわからん。」

この事態に戸惑う二人をよそに、撫子は自身のISのプライベート・チャンネルを使い大和と連絡を取り合う。

（この状態に、いや、現象に慣れているのか？）

その様子を見た千冬がそんなことを思っていると、ダウンしているシステムが回復した。

回復したモニターに映った映像は、ISを見にまどった大和がアリーナへ出て行くところだった。

一夏 対 オルコット、そして・・・（後書き）

少しずつ書き方が進歩していると思いたい・・・。
感想、御指摘、誤字脱字などがありましたらコメントして下さい。

大和の実力（前書き）

やっと、戦闘シーンです。

表現にあまり自信がありませんが・・・。

大和の実力

「待たせたな。」

「レディーを待たせるとは感心しませんわね。まあ、尻尾を巻いて逃げなかったことは褒めて差し上げますわ!!」

「それはどうも。」

先にアリーナのフィールドで待機していたオルコットと言葉を交わした。

《御気分はどうですか？ヤマト？》

《ああ、悪くない。だが、1年ぶりに動かすからな、カンが鈍ってなければいいが・・・。》

《あなたの頭脳と身体能力があれば、あの少女一人問題ないでしょう？》

《簡単に言ってくれるな。》

《分かっているとは思いますが、オルコットの機体は『遠距離射撃型』です。そして、あの兵器には気をつけてください。……………という情報はあなたには不要ですね。》

《そんなことはないさ。》

プライベート・チャネルで撫子と会話をしていると、今度はオープン・チャネルで通信が来た。

千冬からだ。

「1年ぶりとはどういうことだ！？聞いてないぞ!？」

「そのままの意味です。聞いてこなかったので話してません。」

「……………癪に障る返答だな。それで、やれるのか？」

「問題ない。」

撫子はプライベート・チャンネルでの会話を声に出して行っていたらしい。

それだけ聞くと、千冬は一方的に通信を切った。

大和がワザトかと思っただのは言うまでもない。

「1年ぶりだなんて!!あなた、わたくしを舐めてらっしゃるのですか!?!」

オルコットが顔を赤くしながら口を開く。

「気分を害したなら謝ろう。」

大和は素直に謝罪する。

オルコットは続けた。

「今回はお辞めになったほうがよろしいではありませんか?」

「ここまで来て引き返すことは出来ない。」

「そうですね。残念ですわ!!痛い目をみなくてすむ、最後の機会チャンスでしたのにつ!!」

オルコットがそう言い終わつたと同時に、試合開始を告げるアラームがアリーナに鳴り響く。

瞬間、オルコットはブルー・ティアーズ（以下B・T）を大和を囲むように展開。

（拠点攻略型なんて聞いたこともありませんわ!!）

オルコットは最初から全力で戦い、短期戦で終わらせるつもりだった。

そもそも、先の一夏との戦いで自分の手の内は一相手（大和）に筒抜けである。

出し惜しみをしても意味が無いのだ。

なにより、この戦法をとったのは彼女のプライドに寄るところが大きい。

一夏との戦いは自分が勝った。

しかし、あの終わり方、勝ち方は彼女のプライドを大きく傷付けた。あの時、白式のエネルギーがゼロになってなければ負けていたのはオルコットの方だった。

（あんな終わり方、もうしませんわ！！今度こそ確実に、わたくしが勝利してみせますわ！！）

――勝利することでプライドを回復する！！――

そんな焦りがオルコットの判断を誤らせる。

未知の相手と戦う場合、相手の手の内、動きを見る。つまり、様子見がセオリーだ。

戦いで判断を誤った者に勝利はない。この時点でオルコットの負けは、ほぼ確実なものになっている。

大和が動いた。

アリーナのフィールドに出た時点で、大和はヴァーチェのGNバズーカIEIに粒子をチャージし始めていた。

そして今、GNバズーカIEIにはリミッター状態では最大出力の状態で粒子がチャージされている。

「GNバズーカ、圧縮粒子開放・・・！！」

一閃。

右腕に持っているGNバズーカIEIからピンク色の粒子ビームが放出された。

ピンク色の粒子ビームはヴァーチェの右側に展開されていたB・Tを破壊した。

しかし、粒子ビームの放出は終わらず、そのままブルー・ティアーズの方に近づいていく。

大和はGNバズーカをオルコットの方へ薙ぎ払うように動かしていたのだ！！

オルコットがそれに気付いたのは、ヴァーチェ前方に展開していた2機目のB・Tが破壊された後だった。

「なっ！！」

オルコットは大和から見て正面の、やや左側にいたが回避は間に合わなかった。

オルコットが驚いた声を出した瞬間、彼女の左側にあったB・Tのキャリアになっている非固定浮遊部位に粒子ビームは直撃。
アンロック・ユニット

シールドバリアを破り非固定浮遊部位を破壊した。
アンロック・ユニット

その衝撃でオルコットはアリーナの壁の方に吹き飛ばされる。

それでも、地表に落下せず何とか体制を立て直した。

「くっ……。」

シールドバリアを突き破った攻撃。

その衝撃は、絶対防御があるとはいえかなり大きい。オルコットは顔に苦悶の色を浮かべる。

そして、絶対防御が働いたことによりシールドエネルギーが極端に消耗した。

（なんて攻撃力なんですか……。今まで一撃でこんなにダメージを受けたことなんてありませんのに！！これならば少し様子見をした方が良かったですわ……。）

オルコットが自分の行動を悔やみながらも、その圧倒的な攻撃力に驚いていた。

モニタールームも同じような状態だった。

「な、なんだよあれ……。」

「何がおきたのだ……？」

一夏と箒が呆気に取られている。

無理も無い。大和は試合開始後30秒と経たず、オルコットのISに大ダメージを与えたのだから……。

さらに言うならば、GNバズーカからの粒子ビームがオルコットのアンロック・ユニット

非固定浮遊部位を破壊しようと近づいていた時、左肩のGNシールドは下部についているGNビームマシンガンでヴァーチェの後方と左側に展開されていたB・Tを撃ち落としていたのだ。

このことをオルコットは保健室で山田先生から聞いた。

「お、織斑先生、これは一体……？」

「・・・・・・・・山田先生、試合は中止です。」

おろおろする山田先生に試合中止を静かに伝える千冬。
千冬の顔にも少し困惑したような表情がある。

「撫子！！二人に試合中止を伝えてくれ。それから、山田先生はオルコットを保健室へ連れて行ってください。」

「了解。」

「わ、わかりました！！」

千冬の命令に撫子は短く答え、山田先生は返答しながら小走りにモニタールームを出て行った。

「その二人ももう寮に帰れ。」

「は、はい！！」

千冬の声によって我に返った一夏と篤はモニタールームを後にした。

「・・・・・・・・話して貰おうか？」

「まあ、そうなりますね。」

アリーナで観戦していた生徒（といっても一夏の時と違い殆どいなかったのだが）を帰した千冬は大和に対し、着替えたらモニター

ームへ来るよう伝えていた。

撫子も残っている。

その口調は静かだったが有無を言わさないものだった。

「幸いオルコットには目立った外傷もなく、今は寮の自室へ帰っているそうだ。」

千冬はオルコットの容態を山田先生から大和が来る前に聞いていた。

「しかし、ISのダメージが大きい。これも不幸中の幸いなのだが、一応すぐに修理出来るレベルだ。」

「・・・・・・・・。やり過ぎだったことは認めます。しかし、中途半端な力を見せても彼女は納得しなかったでしょう？」

「・・・・・・・・。確かにそうだ。オルコットの性格からすればな。だが、限度をわきまえろ！！あの攻撃、オルコットが真正面から受けていたら確実に大怪我だったぞ！！」

「・・・・・・・・。。。」

しばらく沈黙が続いた。

永遠かと思う程の沈黙の後、千冬が口を開く。

「お前のあのISは何だ？以前、ISであってISではないものと言っていたな、あれはどういう意味だ？」

「機密事項です。」

撫子が即答する。

「と、以前も言いましたが、IS^{（エス）}学園にいる以上、そして、担任である織斑先生にはお話する必要がありますね。」

大和がまわりを気にするよう声を小さくして答えた。
大和は脳量子波で近くに人がいないか確認したあと、自身のISについて話はじめた。

大和の実力（後書き）

ほとんど戦闘シーンないですね（汗

今度はもっと戦闘場면을長く書きたい・・・。

感想、御指摘、誤字脱字などがありましたらコメントして下さい。

ISではないもの（前書き）

いつも読んでいただきありがとうございます。

書きたいことが多いのでなかなか話が進みませんね。

しかし、撫子がまいど空気になるのはどうにかしないと・・・。

ISではないもの

「何を気にしてる？問題ない。現在このアリーナには私達しかいないからな。」

まわりを気にするような素振りを見せた大和に対して千冬は伝える。

「そのようですね。」

大和も脳量子波によってまわりに自分達しかいないことを確認した。

《ヤマト、本当にヴァーチエのことを話すのですか？》

《ああ、予想より早いが。それに、今伝えておけば、後々織斑先生が授業などを配慮してくれるさ。》

《念の為に伝えておきますが、わたしは今すぐ伝えることに反対ですよ。委員会の諮問を受けてもそう答えますから。》

《どうぞ御自由に。委員会からお咎めを受けるのは慣れてる。》

「どうした？話さないのか？」

千冬は少し不機嫌そうな口ぶりで二人に声を掛けた。

大和と撫子は脳量子波で会話していたため、千冬には二人がただ黙って自分のほうを向いているようにしか見えなかった。

時間にして数秒なのだが、千冬は性格上少しイライラし始めていたのだ。

「やはり話せないのか！？」

「すみません。どこから話し始めればいいのか考えていたもので・・・

」。

「どこからか？決まっている。最初からだ！！」

千冬のイライラは募り、声が怒声に近い。

「以前お話ししたように、私の機体はISであってISではありません。せん。」

「それはわかってる。だから何なのだと聞いているんだ！！」

「そのままの意味です。あれはISではありません。」

「・・・何？」

突拍子も無い答えに、千冬の顔色が変わる。

「私は以前、束さんが作成したISのコアのブラックボックスを解析しました。解析はできたのですが、それを再現する技術はありませんでした。唯一再現できたのがコアネットワークぐらいです。それも、かなり限定的な人間にしか扱えないものですが・・・。」

「・・・・・・・・・・。」

「再現したコアネットワーク、ISという『絶対防御』を独自のシステムで構築したもの、そして、ある動力機関の制御システムこれらを一つにパッケージングしたものを開発したんです。私はこれを擬似ISコアと呼んでいます。」

「待て。」

千冬が話を区切る。

「何でしょう？」

「いくつか聞きたい。つまりお前は束の作ったコアとは異なる、新しい種類のISコアを作ったということか？」

「束さんの作成したコアとは似て非なるものですが、一応そういう事です。」

「まったく、お前というヤツは……。」

千冬はそう言うながら頭を抱えていた。
頭を抱えながら質問を続ける。

「昔から何かするヤツだとは思っていたがここまでとは……。それと、『ある動力機関』とは何だ？」

「詳しいことは話せませんが、半永久機関です。その機関から生まれるエネルギーは既存のISのそれを大きく上回るものです。」

「そんな夢物語のようなものが存在するのか!？」

頭を抱えていた千冬が驚愕の顔をし、こちらを向く。

「あなたの目の前にそれが現れたでしょう？ 先程話した、『擬似ISコア』を搭載した機体を『擬似IS』と委員会は呼称しているのですが、擬似ISコアを搭載しただけでは既存のISよりも性能は圧倒的に低いです。」

「そうなのか？」

「はい。擬似ISには自己進化能力、シールドバリア、PICさらワンオフ・アヒリティーに単一仕様能力は存在しません。そのため最初からかなり高いスペックで出来ています。その高いスペックを得るために必要だったものが半永久機関、『GNDライブ』です。」

「……GNDライブ？」

「GNDライブ、通称『太陽炉』ともいいます。この動力機関からは莫大なエネルギーとある特殊粒子が生産されます。正しくは特殊粒子の生産が主でエネルギーが副次的なものです……。」

「特殊粒子……。まさか、あの緑色の光か？」

顎に手をあて考えていた千冬が、閃いたように大和の方を見る。

「その通り。あの緑の光は特殊粒子、つまり『GN粒子』の輝きです。GN粒子は状態によって性質が変わる原初粒子で、例えば、そうですね、先程のようにレーザーや通信機器にエラーを起こしたりもします。」

「GN粒子。お前、そんなモノまで……。」

千冬は驚きを超え、自分の理解の範囲を超えたため思考が半分停止している。

「もつとも、GN粒子を発見したのは父と母なんですが……。あ、ちなみにオルコットを攻撃したピンク色のビームはGN粒子を高濃度圧縮したものです。ですから、正確には粒子ビームですね。」

「……そうか。」

千冬はもうついていけないという顔をしている。
反応が投げやりになってきた。

「それで、貴様のIS、ヴァーチェといったか？さっきの試合で全力か？」

「まさか。さっきの試合は委員会が設定したリミッターが働いていたので、全力の1割り程度ですね。もつとも、リミッターがないとエネルギーは消費量が生産量を超えない限り減ることがないので試合になりませんよ。」

大和はさも当然のように話す。

「………………。オルコットに行った攻撃、あれは試合中に何発打てる？あれだけの威力だ、そうそうは打てまい？」

「そうでうすね。せいぜい4発が限界ですね。5発目を打てばこちらが粒子が尽きるになります。」

「おいおい、シールドエネルギーがないお前にISのルールが適用されるのか？」

ISの試合は「シールドエネルギー」が尽きたら負である。

ちなみに、シールドエネルギーはシールドバリアを破られ、搭乗者を守る絶対防御が発動すると大きく削られる。しかし、擬似ISであるヴァーチェにはそもそもシールドエネルギーがない。

「一応委員会との取り決めで、試合中は一定量貯蔵^{ブール}してある粒子が尽きた時点で負け、ということになっています。」

「その量がさっきの攻撃で表せば約4発分ということか……。」

「はい。」

「攻撃以外では何をすれば減る？」

「GNフィールド、ISでいうシールドバリアのようなものですが、それを使っても減ります。さらに、飛行、移動にも粒子を使っているので、戦えば戦うほど粒子は減りますね。」

「ヤマト。」

撫子が大和を睨む。そして、千冬の方に顔を向け続ける。

「織斑先生これ以上はお話できません。わたし達にも立場があります。これ以上は御遠慮下さい。」

「そうか、聞きたいことはまだあるのだがな……。」

「これ以上知ってしまえば、あなたの身にも危険が及ぶだけでなく、委員会からの監視がつきますよ？」

千冬に対して撫子が脅しをかける。

「私に脅しか？」

「警告です。」

そう言つと両者口を閉ざした。

千冬と撫子は睨み合い、お互いに相手の出方を伺う。

モニタールームに沈黙が続く。

この沈黙を破つたのは大和だった。

「織斑先生。もういいですか？ 私達も転入初日です。いろいろと疲れているのですが・・・。」

一つ溜息をついたあと大和は言った。

「・・・そうだな、この辺にしよう。」

千冬も引き下がった。

ISではないもの（後書き）

お疲れ様でした!!

今回はただただ説明ばかりでつまらなかったかもしれません（汗

感想、御指摘、誤字脱字などがありましたらコメントして下さい。

クラス代表決定 異論は認めん(前書き)

総ユニークが2000を超えました!!
ありがとうございます!!

クラス代表決定 異論は認めん

セシリアは自室のシャワーで汗を流していた。

ISの操縦はかなり体に負担をかける。普通に運動するよりも汗をかくのだ。

代表候補生として例外ではない。

「・・・・・・・・・・。」

シャワーを浴びながら今日の試合を振り返っていた。

『織斑 一夏』

彼はどんなに追い詰められても、実力の差を見せられても自分に向かつてきた。

自分の父親と違い卑屈にならず、自分自身を信じて挑んできた。

その姿、強さ。彼女が理想とする男性像そのものだった。

「知りたい・・・・。」

自然と口から出ていた。

『織斑^{かれ} 一夏』のことをもつと知りたい。

セシリアは胸に熱いものを感じていた。それが自分が彼に恋心を持っているためだと気づくのに時間はかからなかった。

だが、『片桐 大和』にはそのような感情を持つことはなかった。冷静になり、一あの時（試合）のことを思い出すと今は戦慄が走る。

確かに一彼（大和）は強い、それも一夏以上に。

だがその強さは恐怖を超え畏怖に近い感情しか生まれない。

圧倒的な、埋めようのない実力の差を見せつけられた。彼女はそう

感じた。

時間は少し進み場所はアリーナ近く

千冬に解放された大和と撫子はアリーナから出てきた。

「撫子、俺達の寮の部屋って知ってるか？」

「いえ、わたしは何も聞いてませんが・・・。」

「ということは今日は野宿？」

「そんなわけないでしょう！！最悪、近くのホテルに泊まります。」

そんな会話をしながら行く当てもなく歩いていると、向こうから真耶が近づいてきた。

「やっと見つけました。二人に伝え忘れていたことがあります。」

「寮の部屋ですね？」

「！す、スゴイですね！！当たり前です！！」

真耶がテンション高めに答える。

「ええつとですね。片桐くんと片桐さんは当分、同室ということになります！」

そう言い、大和に二人分の部屋の鍵を渡す。

「それは構いませんが……。」

「わたしも構いません。」

「とりあえずです。なるべく早く部屋割りをし直して別室にしますね！」

大和と撫子が同意したあと、真耶が笑顔で答える。

「いずれ別室になるんですか？わたしはヤマトとずっと一緒に問題ありませんが……。」

撫子が真顔で別室になることを静かに拒否する。

真耶は顔を赤くしながら反論する。

「と、年頃の男女を同室にするのは社会的にまずいんです！！それくらい片桐さんもわかるでしょう！！？」

「まずいんですか？」

撫子が残念そうに言うと、もついいやみたいな顔をした真耶は「会議があるので」と言って職員室に帰って行った。

去り際に

「片桐くん！片桐さんに手を出してはだめですよ！！」

と言っていたのは余談だ。

場所は大和と撫子の寮の部屋に移る。

「意外と広いな。」

「そうでうすね。予想より広いです。」

寮の部屋に入り二人は感想を言い合う。

さらに、シャワールームを見て感想を言い合い、ベッドに腰掛ければ評価をし合い、クローゼットに文句を言い合っていた。

ちなみに、自分たちの荷物はすでに部屋に入っていた。

と言っても、二人合わせてダンボール4箱だ。

3箱が撫子のもので、1箱が大和のものだ。

食堂が利用出来る時間ギリギリであるため、荷解きをあとにし、二人は夕食をとるために食堂へ向かった。

次の日

大和と撫子がいつになっても朝食をとり食堂へやってこないのに、一夏と箒は不思議に思っていた。だが、自分達もゆっくりしているわけには行かないので教室へ向かうことにした。

S H Rが始まる寸前、大和と撫子は教室に入ってきた。

入ってきた瞬間に千冬と真耶が来たため、一夏は彼らへの質問は次の休憩にでもしようと思った。

「一年一組の代表は織斑 一夏さんに決まりました。一繋がりでない感じですね！」

真耶がクラス代表に一夏が就任したことを告げる。

「先生、質問です。」

「はい、織斑くん！」

「なんで試合に負けた俺がクラス代表なんですか？」

一夏がもつともな質問をした。

「わたくしが辞退したからですわ。」

セシリアが一夏のもつともな質問に答える。

「じゃあ、大和も辞退したのか？」

「私は……。」

「大和は試合が無効になったからな、そもそも、大和の場合は勝っても負けてもクラス代表には関係ない試合だった。」

大和一夏の間に答えようとしたとき、千冬が割って入った。その後、一夏にISの技術を誰が教えるかで筈とセシリアがもめていたが、これまた千冬の一喝で終息した。

休憩時間

「なあ大和、なんで朝食食べに食堂来なかったんだ？」

一夏は朝しようと思っていた質問を大和にする。

「ん？ああ、私と撫子は朝が非常に弱くてな、授業ぎりぎりになってしまふんだ。だから、朝は食堂に基本行かない。」

「おいおい、大丈夫か？何なら起こしに行ってもいいんだぜ？」

「いや、遠慮しよう（します）。」「」

大和と撫子が同時に答えた。

なぜ、二人がこうも拒否したのかと言えば、人には見せられないような、それはもうひどい状態だからである。

「そ、そうか……。」「」

一夏は苦笑いしていた。

「話は変わるけど、大和と撫子もクラス対抗戦に向けて、ISの練習に付き合ってもらえないか？」

「私は遠慮しよう。多分、参考にならない。」

「わたしはいいですよ。」

一夏の頼みに、それぞれが答える。

「そうだな、こういうことは撫子が適任だ。」

「大和が参加してくれないのは少し残念だけど……。撫子って教えるのうまいの？」

「私より何十倍もうまいな。ただし、彼女はスパルタだぞ。」

大和が参加しないことにホントに残念そうな一夏。

気を取り直し、望むところ！！そう答えた矢先、一夏の後ろから声が聞こえた。

「一夏さんにISを教えるのはわたくしだけで十分です！！」

「いや、その役目は幼馴染みである私の仕事だ！！」

セシリアと箒だ。

二人は朝からその話題で揉めていた。

ちなみに、セシリアの一夏に対する接し方は軟化した。

大和と撫子が教室に来る前にセシリアは一夏に謝罪し、お互い和解したからだ。

（千冬さんに怒られたのに、懲りずにまた来たよ……。）

大和は迷惑に思いながらも二人のやりとりを眺めていた。

「口をはさむようで失礼だが、オルコットはとにかく箒は専用機を持っていない。ISの操縦より、剣を教えるはどうだ？」

「その、大和さん。セシリアと呼んでいただいて構いませんわよ・
・。」

「ん？」

「先日は数々のご無礼申し訳ありませんでした。わたくしの考えが

間違っていましたわ。」

セシリアは大和にも謝罪した。本来ならSHRが始まる前にしたかったのだが、大和も撫子もギリギリに教室へ入ったのでできなかったのだ。

「気にするな。それに、昨日の試合は私にも非があった。大きな怪我はなかったものの、君の専用機を壊してしまった。」

「いえ、試合ですもの、そういう事もありますわ。」
「そう言ってもらえると助かる。」

セシリアと大和も和解したようだ、最も大和は最初から気にしていないのだが……。

「話を戻すぞ大和！！私が専用機を持たないからといって、ISの操縦を教えるてはならないという道理はないぞ！？」

声を荒げ、大和に迫る箒。

「いや、ISを操縦した時間はセシリアに劣るだろう？それに……」

箒からの質問に答える大和。

しかし。途中から一夏には聞こえない声で箒とセシリアに話す。

「一夏を独占できる時間が二人には出来るぞ？」

少し意地悪そうな声で二人に耳打ちする。

「な、何を馬鹿なことを言っている！？」

「や、大和さん、御冗談は休み休み行ってくださいな!!」

箒とセシリアが顔を赤くしながら大和に反論する。

「そうか、なら好きにするんだな・・・。」

大和が我関せずという口振りをし、椅子の背もたれに背中を預け、窓の外に視線を移した。

「た、確かに、大和の言うとおりだな、そのほうが効率がいいかな?」

「そ、そうですね。そのほうがより効率のいい訓練になるかもしれませんわね?」

と、当の一夏に決定権が全く与えられず話が進められた。

一夏は箒とセシリアに文句を言っているようだが、二人とも聞く耳を持たない。

(二人とも素直じゃないな・・・。)

大和はそう思いながら、不幸だと呟きフラフラと自分の席に戻る一夏を見ていた。

クラス代表決定 異論は認めん（後書き）

更新が遅れてすみません。
設定も一部変更しました。

感想、御指摘、誤字脱字などがありましたらコメントして下さい。

中国からの刺客？　いいえ、幼馴染みです（前書き）

学校が忙しく、ほとんど話が書けません（汗
では、続きです。

中国からの刺客？　いいえ、幼馴染みです

ドーン！！

何かが発生したのではないかという音、正確には衝突音がグラウンドに響き渡る。

今日の授業ではISの飛行訓練を行っていた。

一夏とセシリアに手本として実演していたのだが、急降下と急停止の実演で見事一夏は地表に墜落したのだ。
グラウンド

つまり、急降下のみ。急停止はできなかったのだ。

これは急降下というより紐なしバンジーという表現が正しいが。

《落下中の一夏の慌てっぷりからなら、この結果は予想の範囲内だな……。》

《全くです。》

《今度、一夏に急停止を教えてあげたらどうだ？》

《………考えておきます。》

列の後ろから大和と撫子は脳量子波で話していた。

ちなみに、大和は先の試合以降ISを展開していない。理事会から授業でも極力使用を控えて欲しいと懇願されたのだ。

墜落現場には大きなクレーターが出来上がり、その中心に一夏が倒れている。

率先して箒とセシリアが近づき介抱しようとする。

ここで、また二人が揉めだしたのは言うまでもない。

（おいおい、織斑先生の前でそんなコトしてたら……。）

バシッ、バシッ、バシッ！！

（やっぱり。）

大和の予想通り千冬の出席簿アタックが出た。

ちなみに、篝、セシリア、一夏の順だ。一夏はとばかり以外の何もでもない。

その直後、千冬は授業終了を告げた。

「撫子。逃げるぞ。」

「はい。」

一夏は必ず、あのクレーターを処理すると言われる。そうならば必然的に助けにくれと言ってくるだろう。

（（そんな面倒事は、ゴメンだ（です）。））

大和は撫子と共に急いでグラウンドを後にした。

「というわけでっ！織斑くんクラス代表決定おめでとう！！」
「「「おめでと〜！！」「」」

時間は変わり夕方。

寮の食堂で一夏のクラス代表決定パーティーが行われた。
1年1組のクラスメンバーや他のクラスの子もいた。

「・・・・・・・・、あれ？大和は？」

一夏は食堂を見渡し大和がいないことに気付く。

「ヤマトは諸用で今は学園の外にいます。明日の朝には帰ってくる
そうですが・・・・・・・・」

一夏の疑問に撫子が答える。

「そうなのか？撫子は付いていなくてよかったのか？」

「ええ、何でも今回は一人がいいそうなので・・・・・・・・」

撫子が少し寂しそうに答える。

ちなみに、この就任パーティーは22時まで続いた。

次の日

一夏が教室に入ったとき、すでに大和は自分の席で分厚い紙の束と
にらめっこしていた。

「今日は早いんだな。」

一夏が大和に話しかける。

「ああ。今朝、寮に戻らずそのまま教室こつちに来たからな。」

視線を紙に向けたまま答える大和。

「そういえば、昨日のパーティー、撫子が寂しそだったぞ?」

「・・・・・・そうか。」

「ああ。」

その時はじめて一夏の顔を見る大和。

「今度埋め合わせをするさ。」

「そうしてあげろよ。」

そう言うと、また紙に視線を戻す。

「ところで一夏。転校生が来るのを知っているか?」

「転校生?」

「今朝そんな話を聞いてな。何でも中国からだそうだ。ちなみに、代表候補生らしい。」

中国、この単語で一夏はある少女を思い出した。

（あいつ元気かな・・・?）

そんな事を考えていると、一夏の後ろから声が聞こえた。

「あら、わたくしの存在を今更ながら危ぶんでの転入かしら？」

セシリアだ、腰に手を当てながらいつものポーズで話している。

「このクラスに転入するのか？」

今度は筈が近づいてきた。

「いや、2組らしい。」

今度はPCをいじりながら返答する大和。

「大和、お前さつきから何してんだ？」

一夏は朝から忙しそうにしている大和へ聞いた。

「私のIS用の新しい装備の設計だ。」

「お前そんなことができるのか？」

「ああ。」

PCの画面から顔を上げず返答する大和。

大和は続ける。

「そんなことより、クラス対抗戦リーグマッチの方は大丈夫なのか？」

「ああ大丈夫だ！前よりはISをうまく動かせると思う。」

「そうか。なら、今日の放課後、私と模擬戦でもするか？」

そういうと、大和は一夏の方を向いた。

「大丈夫だ、セシリアの時に使った武器は出さない。」

「ほ、本当だろうな・・・？」

一夏の顔が引きつっている。

「ああ。専用機持ちはお前と4組だけだから、今のまま訓練を続けたも優勝できるだろうが・・・。」

大和がそこまで言ったところで、ドアの方から声が聞こえた。

「その情報、古いよ!!」

そこに立っていたのはツインテールの女の子だった。

「2組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないからね!!」

「鈴^{リン}・・・・・・？お前、鈴か!？」

一夏のこの言動、どうやら知り合いらしい。

「そうよ!中国代表候補生、凰^{リンイン}(ファン)——鈴音!今日は宣戦布告に来たってわけ!」

「御丁寧にどうも、でもそろそろ・・・。」

大和が言い終わる前に、鈴の後ろから声がした。

「おい。」

「なによ!?!」

ゴン！

鈴は振り向く前に頭を軽く殴られた。
ただし、千冬からしたら軽くであって、普通の人からすれば結構強い打撃だ。

「ッー！いったー！何すんのよ！？」

「もうSHRの時間だ。教室に戻れ。」

「ち、千冬さん……………」

千冬の方に振り向いた鈴の顔からさっきの勢いが消えた。
明らかに、バツが悪そうな顔をしている。

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ。入り口を塞ぐな、邪魔だ。」

「す、スミマセン……………。また後で来るからね！逃げないでよね、一夏！」

そう言つて鈴は自分の教室へ帰つていった。

「何かあつたんですか？ヤマト。」

いつの間にかやってきた撫子が大和に話しかける。

「いや、箒とセシリアにライバルが増えたただだ……………」

そう言いながら大和はPCを片付けた。

昼食で箒、セシリア、鈴が一悶着起こしたことは言うまでもない。

中国からの刺客？　いいえ、幼馴染みです（後書き）

あまり話は進んでませんね。

今日中にもう一話投稿できたらいいんですが…。

感想、御指摘、誤字脱字などがありましたらコメントして下さい。

一夏 対 大和

時間は放課後場所はアリーナ

「では、始めようか・・・。」

「お手柔らかに頼むぜ!」

お互いにISを纏った大和一夏。

離れたところで撫子と箒、セシリアが見ている。アリーナの観客席にも生徒が何人か見学に来ている。

一夏は雪片式型を正面に構え大和に突撃する。

大和はそれを最小限の動きで躲す。

「ちっ!」

「・・・・・・・・。」

今度はおおきく振りかぶって大和に向かう。

ガッ!!

雪片式型を振り下ろしはじめた瞬間、大和は一夏の手首を右手で掴む。

「なっ!!」

一夏が驚き目を見開く。

大和はそのまま背負い投げの要領で一夏を地面の方に放り投げる。

ドンー!!

一夏は空中で体勢を立て直せず地面に衝突する。

「グッ!! つうく……。」

「まだ動きに無駄が多すぎる。カウンターを狙われぞ!!」

「わ、わかってる!!」

大和に注意され一夏は再度、大和の方に飛んでいく。

「こちらも、武器を出すか……。」

そう言い、大和はビームサーベルを腕から出す。

「そんなとこにしまってるのかよ……。」

一夏は苦笑いしている。

「行くぞ!!」

今度は大和が一夏に突撃する。

連続して斬りかかり、一夏を追い詰める。

雪片式型で防いだり、避けているが箒よりも斬撃の速度が何倍も早い。

（っ!! このままじゃ、そのうち防ぎきれなくなる!!）

何か手はないかと一夏は考えていると。

「考え事か? そんなんじゃ……。!!」

大和がそう言うと、ビームサーベルを手首を使って円を描くように回し、サーベル部分で雪片式型のエネルギー刃を絡めとり、そのままアリーナの壁の方に雪片式型を投げ飛ばした。

「なっ・・・！？がつー！」

呆気にとられ飛んでいった雪片式型に視線を移した一夏。

その瞬間、左脇腹に鈍い痛みが襲い、アリーナの地面に勢い良く飛んでいく。

大和が一夏の左脇腹に回し蹴りをしたのだ。

「試合中、相手に接近しているときはソイツから目を離すな。」

そう言いながら、立ち上がろうとした一夏の喉元にビームサーベルの切っ先を向ける。

「・・・・・・参ったよ。降参だ。」

一夏は半身を起こした状態で両手を挙げる。

ビームサーベルの刃を消した大和が一夏に右手を差し出す。

それに捕まり立ち上がる一夏。

「一あの時（セシリアとの試合）より格段に動きがよくなっている。特訓のおかげだな？」

「そうか？今の試合じゃ全然上達してない気分になるけど・・・。」

大和の批評に、立ち上がった一夏が答える。
離れたところにいた三人が近づいてくる。

「大和さん！私の時も一夏さんみたいにお手柔らかにお願いして頂きたかったですわ！」

セシリアが頬を膨らませながら文句をいう。

「しかし強い大和は！結局、一夏の攻撃は一度も当たらなかったし。情けない……。」

「そうでもないさ。」

ISを解除し簾に答える大和。

「あの時、今みたいに手を抜いたら、セシリアは怒ってただろう？」
「そ、それはそうかもしれないませんが……。」

セシリアの方を向き核心をついたようなことを言う大和。
図星なのかセシリアは口籠る。

「後は二人に任せる。それともセシリア、勝負するか？」
「け、結構です。」

大和の提案にセシリアは両手を振って断る。顔は苦笑いだ。
そうか、とだけ言って大和はアリーナから出て行った。その後ろを撫子がついて行く。

「なあ、あの二人って付き合ってるのか……？」

それを見ていた一夏が簾とセシリアに聞く。

「「さあ……？」」

珍しく二人が声を揃えて答えた。

場所は変わり大和と撫子の部屋

「一夏くんはどうでしたか？ヤマト？」

PCに向かい何か作業をしている大和へコーヒーを渡しながら撫子は聞いた。

「ああ、思ったよりも飲み込みが早いのか、だいぶうまく動かししている。やはり姉弟なのだな。」

コーヒーを受け取った大和が撫子に答える。

「そうですか。」

撫子は大和のベッドに腰掛けた。

「・・・・・・・・・・撫子の指導がよかったのかもな？」

撫子は昨日まで一夏に基本的な動作を教えていた。傍から見ればかなりのスパルタだったらしい。

「わたしは基本しか教えてませんよ？」

「何事も基本が大事だ。・・・・・・・・・・ところで、今度の日曜は何か予定はあるか？」

「ありませんが？どうしました？」

「久しぶりに二人で出かけようと思うんだが・・・。」
「ホントですか!？」

急に撫子のテンションが上がる。クラスでは見せたことがないくらいに。

「ホントだ。ダメか？」

「大丈夫です!!！」

「わかった。どこか行きたいところがあるか？」

「駅前のショッピングモールに行きたいんですが・・・。」

「じゃあ、そこにしよう。」

「はいっ!!！」

撫子のテンションが日曜までやたら高かったのは言うまでもない。

一夏 対 大和（後書き）

1日に2回更新できるのは珍しいです。
内容は・・・まあ、微妙ですがね（汗

感想、御指摘、誤字脱字などがありましたらコメントして下さい。

クラス対抗戦開始

リーグマッチ
クラス対抗戦当日

モニタールームで千冬、真耶、箒、セシリアは一夏と鈴の試合を見ている。

鈴の斬撃を紙一重で躲す一夏。
セシリアは一夏に自分の教えた技を使えと叫んでいる。

「そつえば、片桐くんと片桐さんを朝から見ませんね？誰か知ってますか？」

「大方、まだ寮で寝ているんだろう・・・。」

思い出したように真耶は呟いた。その呟きに千冬が答える。
その時、鈴から距離をとろうとした一夏の横を何かがかすめた。

「どわっ！！つつっ！！」

「今のはジャブだからね！！」

ドンッ！！

「がっ！！」

眼に見えない何かが一夏にぶつかった。
一夏は地面に落下する。
なんとか立ち上がった一夏に鈴は攻撃を続ける。それを一夏はなんとか避ける。

「な、何だ今の攻撃は!？」

モニターを見ていた箒は呟く。

「・・・衝撃砲か・・・。」

「衝撃砲・・・?」

来賓席で肘をついて座っていた大和はポツリと呟いた。
後ろに控えていた撫子が大和に聞き返す。

大和は撫子に説明する。

「空間自体に圧力をかけ、砲弾を撃ち出す第3世代型兵器だ・・・。
しかも・・・。」

「あの衝撃砲は砲身の射角がほぼ制限なしで打てるようです。
つまり、死角がないということです・・・?」

モニタールームでも真耶が箒とセシリアに解説していた。
それを聞いたセシリアが絶望的な結論を言った。

「だが、あの一衝撃砲（龍砲）にも弱点がある。」
「え!？」

大和が続ける。

「一見弱点が無いように見えるが、あれは打つまでに時間がかかる。
それを隠すために鈴は交互に打ってるんだ。」

「なるほど……。」

大和の解説を聞いた撫子が頷いているとき、大和は来賓席から立ち上がり移動し始めた。

「どちらへ？」

「モニタールームだ。」

そう言つて、大和は早歩きで目的地へ向かう、それを撫子が追いかける。

時間は少し進む

「鈴！……本気で行くからな！！」

一夏がそういつた瞬間、モニタールームの扉が開いた。

「千冬さん！今すぐ二人をピットに戻して下さい！」

そう言いながら大和が入ってきた。

「織斑せんさ……。」

振り向きながらそう言っていた千冬が、大和の姿を見た瞬間口を閉じた。

そこには、IS学園の制服ではない制服を身に纏った大和と撫子がいた。

箒とセシリア、真耶は状況が飲み込めず固まっている。

「どついつ事だ？」

「説明は後です！ッ！？」

ゴッ！ドーン！！

そういったとき、アリーナのフィールドにオレンジ色のビームと『何か』が落ちてきた。

その衝撃はモニタールームにまで響いた。

「山田先生！！状況は？」

千冬が真耶に状況を報告させる。

「システム破損！！何かがアリーナの遮断シールド貫通してきたみたいです！！」

真耶がいつもとは違う真剣な顔で報告する。

報告を聞いた千冬は試合中止を一夏と鈴に伝える。

伝え終わった直後、無線が使えなくなった。

一瞬、モニターに赤色の粒子を吹出す機体が見えた。

大和はそれを見逃さない。

すぐに一夏と鈴にプライベート・チャンネルで連絡する。

《二人とも聞こえるか！？》

《大和か！？なんなんだこれは！？》

《そんなことはいい！！今すぐ逃げろ！！》

《逃げろって・・・、そんな事したら観客席の人が！！》

鈴が全部言わなくても大和も理解している。

アリーナの遮断シールドを突破してきた程の威力だ。

アレに観客を狙われたら恐らく一溜まりもないだろう。

《………わかった。そのかわり、決して攻撃するな!!私が行くまで回避に専念するんだ!絶対に当たるなよ!》

そう言つて大和はチャネルを切る。

大和は千冬の方に近づく。

「千冬さん……。」

「何だ?大和?」

「日本政府には?」

「救援を要請した……。」

「そうですか……。」

それだけ聞いて、撫子の方を向く。

「撫子!」

「はい。委員会、並びに司令部より正式な指令です。」

撫子に渡された端末を見る。それを千冬にも見せる。それを見た千冬がかなり険しい顔になった。

「ここからは私が指揮を取ります。よろしいですね?千冬さん?」

「構わん!好きにしろ!」

そう言つて大和に端末を返す。

「撫子、状況は?」

「現在、アリーナの遮断シールドがレベル4になっています。さらに、すべての扉がロックされています。おそらくアレの仕業かと……」

」。

「なるほど。観客席にいた生徒の避難も出来ていないと……。」

「はい。」

「扉のロック解除は撫子に任せる。その後の生徒の退避は……。」

そこまで言って大和は千冬の方を見る。

「千冬さんあなたにお任せできますか？」

「無論だ！」

「お願いします。撫子、ピットへ行くまでの扉のロックは？」

「あと20秒で全て解除できます。」

「よし！！では、私はピットへ向かう。フィールドへ出たら二人にピットへ退避し、モニタールームへ行くよう指示を出しておく。二人がモニタールームへ着いたら、ピットまでの扉を再度ロックしてくれ。」

「了解です。」

作戦は立てた、早速準備に移る大和と撫子。

「あ、あのっ！お二人は一体……？」

状況が把握しきれていない、セシリアが大和に聞く。

状況が把握しきれていないのは第も真耶も同じだが……。

「……、仕方ないか……。」

大和は呟いた。

「『ソレスタル・ビーイング』所属、片桐 大和准将だ。」

「同じく、片桐 撫子中佐です。」

二人は改めて自己紹介した。

「ソ、ソレスタル・ビーイング……。都市伝説だと思ってましたあ……。、実在するんですね……。」

真耶が呟く。

大和と撫子はそれ以上の説明をせず、作業に戻った。

大和からの通信が切れたあと、二人は言いつけ通りひたすら攻撃を避け続けていた。

「ああー！もう！焦れたいわね！！」

「そんな事いうなよ！大和が何時にアイツなく語気を強めて言ったんだ、従おうぜ！とっ！あぶねっ！」

正確には反撃することができないのだ。

反撃による隙を狙われれば確実に殺られる。そんな威力を持ったビームなのだ。

一夏のハイパーセンサーの簡易解析によると、以前見たヴァーチェのGNバズーカを超える威力らしい。

（あんな威力のビームを受ければ一発でオダブツだ……。！）

一夏はヴァーチェのGNバズーカの威力をその目で見た。

それゆえに、相手に対し反撃せずただ回避に専念しようとする。

鈴も同じだ。自分がかつて見たこともない程の威力を持ったビームそれが直撃すればどうなるか、代表候補生ともなれば容易に想像で

きる。

（あんな、ビーム見たことない！！なんなのよ！！）

そんなことを考えていたせいか、鈴の動きが一瞬遅くなった。
それを敵は見逃さない。

鈴に向けてビームを打つ。直撃コースだ。

「鈴！！クソッ！間に合ってくれ！！」

一夏は瞬間加速で敵と鈴の間に飛び込む。
イグニッション・ブースト

クラス対抗戦開始（後書き）

なんか展開早いですね。

今後はオリジナルストーリーを混ぜていきたいです。

感想、御指摘、誤字脱字などがありましたらコメントして下さい。

大和 対 侵入者（前書き）

気に入らないところがありますが、とりあえず投稿します。

4 000 ユニーク突破！！ありがとうございます！！

大和 対 侵入者

「撫子、私の準備は出来た。」

「了解です。タイミングはヤマトにお任せします。それと・・・」

ヴァーチエを展開した大和が通信越しに撫子と会話していた。
解っている、とだけ言い大和はピットから飛び出た。

「鈴！！クソッ！間に合ってくれ！！」

侵入者と鈴の間に割り込む一夏。

侵入者の放ったビームが一夏に迫る。

為す術がなく目を瞑る一夏、鈴。

しかし、いくら待ってもビームが当たる気配がない。

恐る恐る目を開く二人、そこに立っていたのは緑色の光に包まれた
ヴァーチエだった。

「や、大和！！」

一夏が声を上げる。

鈴は大和のIS（正確には擬似ISなのだ）を見たことがなかった
ので、目を丸くしている。

「すまない、遅くなった。二人とも、このピットから脱出してくれ、侵入者は私がやる。」

大和はそう言いながら、指定するピットの色を反転させたアリーナの見取り図を二人に送る。

「でも、人数が多いほうが・・・。」

そこまで鈴が言ったところで、一夏が口を挟む。

「鈴、大和一人でも大丈夫だ。そうだろ？大和？」

大和の強さを知っている一夏だからこそ、今の自分達では大和の足手まといになると思ったのだ。

「鈴の心遣いには感謝するが、一夏の言うとおりだ。私だけで十分。」

鈴の心遣いに感謝しながらも一夏の言うことを肯定する大和。

その時、アリーナ上空からビームが落ちてきた。

それと同時に新たに2機の侵入者が降りてくる。

「来たか・・・。行け！！二人とも！！退路は私が護る！！！！！」

そう言いながら大和は戦闘態勢に入る。

「ああ！！！」

そう言いながら、未だ納得できないような顔をしている鈴の腕をつかみ、一夏は指定されたピットへ向かう。

それを追う侵入者は二人に向けビームを連射する。
そのビームをGNフィールドを展開した大和が防ぐ。

（スゲー。あの威力のビームをこうもあっさり……。）

チラッと大和を見た一夏が驚く。

現在大和はヴァーチェのリミッターを解除している。
つまり、本来のヴァーチェの力を使えるのだ。

二人がモニタールームへ着いたと撫子から連絡が来た。
予定通りピットまでの扉もすべてロックした。

「撫子、観客席の生徒の避難は？」

「すでに完了しています。」

「わかった。ご苦労だったな。」

いえ、とだけ言い撫子は通信を終えた。

「無人ISか……。」

ヴァーチェが『生体反応なし』という結果を提示したのを見て大和
が呟く。

呟きながら侵入者を改めて見る。

（機体表面にGN粒子供給用コードがないことを見ると、GNドライ
ブ搭載を前提とした機体か？それとも、GNドライブ搭載用に再
設計したものか？）

そんな事を思いながら、ヴェーダから帰ってきた結果にも目を通す。

『該当情報なし』

「やはりか……。」

大和が予想した通りの結果が帰ってきた。

ちなみに、この間にも無人ISからの攻撃は続いている。

無数に放たれたビームは寸前で躲されたり、GNフィールドで防がれたりしている。

「……スゲー……。」

モニタールームで大和の戦いを見ていた一夏が呟いた。

自分たちがなんとか避けてたビームをいとも簡単に避け、防いでいる。

他のメンバーもそうだ。

一夏の時に比べビームの量が単純計算で3倍になっている。

そのはずなのに、大和はなんの問題もなく避けている。

モニタールームにいる全員（撫子と鈴を除く）が改めて、大和のポテンシャルの高さを確認した。

「しかし、わからんな。」

千冬が口を開く。

「あいつほどの攻撃力があれば、あの3機を倒すことなど造作も無いはずなんだが……。」

確かにそうだ、その疑問に撫子が答える。

「ヤマトは現在あの3機について解析しています。」

モニタールームにいた全員が驚いて撫子の方を見る。
あの猛攻の中そんなことができるはずないのだから。

「その証拠に、大和から送られてきたものです。」

撫子が画面に映す。

そこには、侵入してきたISの行動パターン、武装の特性が書かれていた。

さらに、注目される情報も。

「無人機だと・・・？」

モニタールームに居た撫子を除く全員が驚愕した。

ISは人が乗ってこそ動く物その定説が覆されたのだから。

しかし、一夏は妙に納得していた、あのISと向き合っていたときに感じた原因はこれだったのかと。

「さて、そろそろ反撃するか・・・。」

ある程度動きを見た大和は両手にGNバズーカを呼び出した。

無人ISのビームを避けながらGNバズーカに粒子をチャージしていく。

粒子のチャージが終了したことを確認し、タイミングを待つ大和。

無人ISからのビームを右左下上と移動しながら避ける。

大和がフィールドの地面すれすれを移動しているとき、2機の無人

ISが高度を上げた。

それを待っていたと言わんばかりに、大和が地面に背中を向け、GNバズーカの照準をその2機に合わせる。

「GNバズーカ、高濃度圧縮粒子・・・開放!!!!」

その掛け声と共にGNバズーカからピンク色の粒子ビームが放たれた。

2機は避けようとするが、間に合わない。

ドッオオオー!!

粒子ビームは直撃し機体は蒸発した。

「なっ・・・!!」

モニタールームにいた一夏達は目を見開いた。

以前セシリアに向けて放ったビームよりも太く、スピードも早い。なによりその威力、無人ISが跡形もなく蒸発したのだから。

ドッゴオオオオンッ!!

2機に直撃し蒸発させた粒子ビームは、アリーナ上部の遮断シールドを完全に破壊した。

「これ程とはな・・・。」

セシリア戦ではリミッターをかけていたことを知っている千冬は呟

いた。

他のメンバーは開いた口が塞がらないようだ。

「やり過ぎです。ヤマト……。」

撫子はため息混じりに呟いた。

「残り1機!!」

大和はGNバズーカを量子化し、両腕からビームサーベルを取り出す。

GNフィールドを機体前面に最大出力で部分展開、瞬間加速で突撃する。

イグニッション・ブースト

無人ISは大和に向けてビームを連射する。

そのビームはGNフィールドに阻まれヴァーチエに当たることはない。

ビームサーベルの間合いまで接近したところでGNフィールドを解除。

ビームサーベルを上には振りかぶった後、一気に振り下ろし両腕を切断。

今度は両腕を左右に広げ、右から左に、左から右にそれぞれのビームサーベルを振り抜き両足を切断。

最後に左肩のGNシールド上部にあるGNビームガンが首を撃ち抜き、無人ISは完全に沈黙した。

大和 対 侵入者（後書き）

ところどころ日本語がおかしい部分がありますが、とりあえず投稿しました。

修正したら再度投稿するかもしれません。

ご感想、ご要望があればコメントお願いします。

事後処理（前書き）

祝5、000ユニーク突破！！ありがとうございます！！

事後処理

IS学園地下50メートル

そこには一般の学生には知らされていない空間がある。

『LEVEL4』そう書かれたセキュリティゲートをくぐる人影が1つ。

「解析は進んでいますか？織斑先生、山田先生。」

大和が画面を見つめる二人に話しかける。

「か、片桐くん！！ここは一般の生徒が立ち入っていいばsh・・・」

「構わん。コイツには入室許可がおりている。」

大和の姿を見た真耶が焦りながら口を開くが、千冬に遮られる。

「そ、その、許可って『ソレスタル・ビーイング』絡みなんですか？」

「お答えできません。」

大和が即答するので残念そうな顔をする真耶。

「ところで、解析の方は・・・。」

ここを訪れた目的を果たすために再度二人に問う大和。

「ああ、そのことなのだが・・・。」

「その話、私も混ぜてもらえるかしら？」

千冬が話そうとしたとき、入口の方から声が聞こえた。
千冬と真耶以外に誰か居ることが分かっていた大和だが、あえて何も言わなかったのだ。

「更識か。」

千冬が入ってきた少女の名を言う。

「・・・更識さらしき 楯無たてなし。」

大和が彼女の顔を見て、誰にも聞こえないよう呟く。
自己紹介もされていないのに名前がわかったのは、ヴェーダから情報呼び出したためだ。

「私は生徒会長の更識 楯無。はじめまして、片桐 大和くん♪」
「・・・こちらからの紹介は必要ないようだな・・・。」

楯無からの自己紹介を受けた大和が口を開く。

「ええー。おねーさんはもっと詳しく知りたいな。」

彼女の言うことも間違いではない。

暗部に対する対暗部用暗部「更識家」の当主であり、17代目の楯無である彼女。

その彼女ですら、IS学園に来る前の大和の経歴は彼のISのことも含め一切不明なのだ。

「そんな事はいい。織斑先生続きを。」

大和は楯無の発言を受け流し、千冬に続けるよう促す。

「結論から言えば、無人の正体不明のISだ。コアも未登録のものだった。」

「無人？遠隔操作されていたの？」

千冬の説明に楯無が聞く。

「いや、おそらくそれはないな。」

楯無の質問に大和が答える。

「動きがパターン化しすぎていた、遠隔操作されていると思えないな。臨機応変に対応出来ていないので、自立型ともいえない。」

戦いを振り返りながら大和は言った。

千冬が続ける。

「大和がそう言うなら間違いないだろう。問題はこれだ。」

机の上には無人ISから回収したコアともう一つ円筒状の物体が置かれている。

千冬は円筒状の物体を指しながら言った。

「見たこともないパーツだ。解析も出来なかった。」
「・・・GNDライブ。」

大和がボソリと呟く。

部屋にいた全員が大和の方を見る。

「大和君、何か知ってるの？」

楯無が大和に聞く。

しばらくの沈黙の後大和が口を開いた。

「私が開発した半永久機関だ。ただし、私が開発したものと構造的に異なる。おそらく用いられている理論やシステムも異なるだろう。」

「半永久機関……。ということはシールドエネルギーが無限というのかしら？」

楯無が大和を問い詰める。

「わからない。詳しいことはこれを解析しないことには。」

そう言い、大和は机の上のGNドライブを手にする。

「……織斑先生。」

そう言いながら、大和が千冬の方を向く。

「……何だ？」

「来週から1週間ほど休んでもよろしいでしょうか？」

しばらく沈黙が続く。

「……いいだろう。そのかわり、それについてわかったことはすべて報告してもらう。」

「了解しました。」

それだけ言って、部屋を出る大和。
私も失礼しますと言って楯無も退出する。

「織斑先生、片桐くんって何者なんですか？」

「・・・本人に聞いてみてはどうだ？山田先生。」

真耶はええ〜と言っているが、千冬は気にせず回収された無人ISの残骸を見ていた。

「大和君、君は何者なの？」

エレベーター内で楯無が大和に問う。

大和は腕を組み、壁に背を預けている。

「あまり、詮索しないほうがいいですよ更識さん。」

「楯無でいいわ。失礼だけどあなたのこと、いろいろ調べさせてもらったわ。」

結局何もわからなかったけど、と付け加えながら肩をすくめる楯無。

「それにしても、大和君は強いね。さっきの戦い見せてもらったわ、録画だけど。」

そう言って大和に笑顔を向ける。

「そうやって探りを入れるのは癖か？17代目楯無。」

大和がそう答えると、少し驚いた顔をしながら楯無は言った。

「あなたも人のこと言えないわね」私の経歴を調べたの？」

「・・・職業柄な。」

そう言うと大和は目を閉じた。

「まあ、いいわ。・・・ところで、大和君は生徒会に入る気はない？」

「・・・私は部活動、委員会等への所属を理事会から禁止されている。もつとも、私自身入る気もない。」

残念、楯無がそう言いながら『残念』と書かれた扇子で口を押さえていた。

しばらくしてエレベーターは地上に着いた。

事後処理（後書き）

そろそろ、大和のライバル的なキャラを登場させたいですね。

ご意見、ご感想があればコメントしてください！

設定2（前書き）

敵ISの設定などはここに随時更新していきます。

一部追記しました。

設定 2

敵オリジナルIS・メカ・キャラクター

敵オリジナルIS

機体名 ジンクスI

製作者 不明↓M

操縦者 なし

世代 第4世代相当

タイプ 中距離射撃型

クラス対抗戦の際に侵入してきたGNドライブ搭載型無人IS。

搭載されているGNドライブは大和が作成したGNドライブよりも、単位時間あたりの粒子生産量が多い。

大和が作成したGNドライブとは構造、システム、理論が異なる。

擬似GNドライブと同じく、外部からエネルギーを与えることでGN粒子を生み出す。

GNドライブを搭載しているため既存のISよりも火力、機動性に優れている。

あらかじめ組み込まれたプログラムに基づいて行動するため、動きが単調になりやすいため、熟練のIS操縦者であれば、複数を相手にしなければ造作もなく倒せる。

外見はガンダム00のジンクスI。

右手にGNビームライフル、左手にGNバズーカを装備している。

装備

GNビームライフル

本機の主兵装。GNバズーカに比べ連射性は優れているが、その分威力は低い。

GNバズーカ

本機で最も火力の強い武器。リミッターモードのヴァーチェのGNバズーカより火力が上だが粒子のチャージに時間がかかる。

機体名 スローネツヴァイ

製作者 M

操縦者 アリー・アル・サーシエス

世代 第4世代相当

タイプ 近距離格闘型

深夜にIS学園へ侵攻してきた（結果的に、侵攻前に大和によって迎撃された）遠隔操作型のIS。

フル・スキントップ

全身装甲型のISで、擬似GNDライブを搭載している。

開発コンセプトは先のジnkスIの後継機開発のための試験機体としての色が濃い。

試験装備として「GNファング」や「GNバスターソード」がある。遠隔操作は未成熟でサーシエスの反応速度、操縦センスに追従出来ていない。

遠隔操作により、性別データを女性として偽っているため男性であるサーシエスでも操縦が可能になっている。

スローネシリーズは3機建造され、それぞれ得意とする戦闘スタイルが異なる。

サーシエスにツヴァイが与えられたのは、彼の戦闘スタイルを考慮した結果である。

外見はガンダム00のガンダムスローネツヴァイで上記の通り全身フル・ス
キンタイプ
装甲。

装備

GNバスターソード

右肩に懸架されている巨大な実体剣。
表面にGN粒子をコーティングすることで強度や切れ味を高めている。

刀身に内蔵されたGNコンデンサーからGN粒子を放出することで、
ビームサーベルと同様の機能を発現できる。

GNハンドガン

左腕下部に固定されている小型ビーム砲。

使用する前に大和によって破壊されたため、出番はなかった。

GNフアング 8基

牙のような形状をした遠隔操作可能な移動ビーム砲。

先端部からビームを放ったり、ビームサーベルを展開し敵に突撃させたりして使用する。

両腰のバインダーに合計8基搭載されているが、通常は6基で運用し、残りの2基は予備として緊急時や強襲に用いる。

敵オリジナルキャラクター

名前	アリー・アル・サーシエス
年齢	30代
性別	男
職業	傭兵

亡国機業に雇われた傭兵。

自らが戦が好きで好きでたまらない、人間のプリミティブな衝動に殉じて生きる、最低最悪の人間と称する戦闘狂。

世界中で暗躍する傭兵だったが、ISが発表されてからは戦いの主役がISに移り、自身の行き場を失い酒に走っていたが、突出する戦闘能力をかわれ亡国機業に雇われる。

ISの操縦センスは大和に勝るとも劣らないものである。

設定2（後書き）

言わずもがな、オリジナルISやオリジナルキャラクターはガンダム00からきてます。

設定は微妙（？）に変えてますが・・・。

問題ないよね・・・？

それぞれの思い

大和が3機の無人ISを倒したところまで時間はさかのぼる。

「ミッション完了。^{コンプリート}これより帰投する。」

「お疲れ様です。ヤマト。」

「千冬さん、そこに転がっている侵入者は学園側で回収してください。」

「・・・わかった。」

そう言いながら大和はピットに戻った。

モニタールーム

モニターで大和がピットへ入っていくのを千冬と真耶が見ている。

「圧倒的でしたね。織斑先生。」

「・・・ああ。」

「?どうかしたんですか?」

「いや、何でもない。」

そう言って千冬はモニターから目を逸らした。

（あれが、大和のいやあの機体の本来の力。一人の人間が持つに
てはあまりにも度が過ぎた力だ。^{アイツ}大和は何のためにあの力を必要
とした?何が目的なんだ・・・?)

そんな事を思いながら千冬は再度モニターを見る。

時間は進み、場所は食堂に移る。

一夏、箒、セシリア、鈴は夕食を取っていたがなかなか進まない。さっきまで事情聴取を受けていたのだ。もちろん、先の侵入者の件である。

食が進まないのは事情聴取による気疲れもあるが、それ以上に大和の戦いを見たことによるものが大きい。

一夏はさっきの戦いを思い出していた。

（大和の実力は分かっている。そう思っていた。でも、さっきの戦いでわかった、あいつの実力は底が知れない。）

そう思いながら、一夏にある『覚悟』が決まった。

（いつか必ず大和と並んで戦う。それだけの実力を付けるまで、俺は進み続ける！）

覚悟を決めた目を一夏はしていた。

箒は一夏の方をチラリと見た。

（私は・・・何も出来なかった・・・、一夏を救いに行くことさえ・・・。）

想い人を救いに行くことさえ出来なかった自分に無力感が湧き、自然と左手に力が入る。

（私にも専用機があれば・・・、私に・・・力があれば・・・。）

自分の無力感と力の無さに、箒は唇を噛んだ。

セシリアはフォークを持ったまま自分の食器を眺めていた。

（やっぱり大和さんはわたくしに対して本気ではありませんでしたわ・・・。）

薄々気付いていたが今回ではつきりした。

（あの方はわたくしとは次元が違いすぎますわ・・・。それでも・・・。）

セシリアは自分の『誓い』を思い返し、決意を新たにした。

鈴はラーメンをすすりながらさっきの侵入者と大和のことを考えていた。

（あの馬鹿みたいに威力の強いビームをあっさり防ぐなんて、あのISは何なの！？それに、あの侵入者のビームよりも強いビームを撃つなんて・・・、どんだけ反則なの！！）

ラーメンをやけ食いしながらもさっきの戦いを思い返す。

（でも、アタシのミスで・・・一夏は・・・）

箸を止め思った。

あの時、鈴を庇って飛び込んできた一夏。

直撃していたら間違いなく大怪我では済まなかった。

「・・・ツツ!!」

鈴は誰にも聞こえないよう舌打ちした。

その場にいた全員が経緯は異なっても、一様に思った。

（（（強くなる（なりますわ）（なるわ）!!）（（（

場所は変わり大和と撫子の部屋

撫子は電気も付けず、部屋の椅子に座って窓の外を眺めていた。
外はいつにもなく赤く染まっていた。

「・・・あの人らしかったわね。」

そう呟き、大和の机を見る。

「いつだって、あなたは他人が危険にさらされるのを嫌がるんだから・・・。」

そう言い、撫子はまた窓の外を眺める。

「もう少し、わたしを頼ってくれてもいいのに……。」

自分のささやかな願いを呟いた。

寮の屋上

撫子と同じく大和も夕日を見ていた。

「なんの御用ですか？ 織斑先生？」

「……言わなくても分かっているんだろう？」

大和が後ろから近づいてきた千冬に顔を向けず声を掛ける。

「一応、聞いてみただけです。」

そう言って、大和は千冬の方に体と顔を向ける。

「頼まれていた外出許可書だ。」

千冬は書類を大和に手渡す。

「しかし、便利なものだな、『脳量子波』は。」

「……そうでもないですよ。」

脳量子波

すべての人が潜在的に持っている脳波の一種。

扱いに長けている人であれば、相手の思考を読み取ったり、物体の位置、移動速度を認識することができる。

「今日の襲撃もそれでわかったのか？」

「それだけではありません。より広い領域を探知するためにヴァーチエの力も借りました。」

「それでも、大したものだな。」

「・・・ところで、なぜ織斑先生は脳量子波のことを？」

脳量子波は現在、国際IS委員会の監視下に置かれている一部の研究所で日夜研究が行われているものだ。

「お前が転校してきた直後に束から聞いた。」

「あの人はまた機密事項をベラベラと・・・。」

大和の表情は変わっていないが、口調は明らかに困った感じだった。

「・・・束さんは元気そうでしたか？」

「ああ、相変わらずだ。・・・束とも連絡を取り合ってなかったのか？」

「はい。基本的に外部との連絡は許可制でしたので・・・。」

そうか、と千冬が答え暫く沈黙する二人。

「・・・お前は何のために力を手にしたんだ？」

沈黙を破ったのは千冬だった。

「・・・。。。」

「昔のお前は、私の知っている『片桐 大和』はそんな男ではなかった。何があつてそうなった!？」

「・・・。。。」

「答える!!--」

自然と語気が強くなる千冬。

「・・・怖いからですよ。」

大和はポツリと答える。

「・・・自分の周りから、大切な人がいなくなるのが怖いんです。」

そう言つて、大和は千冬から視線を離し、沈みかけている太陽に視線を移す。

「・・・御両親のことか・・・？」

千冬の独り言のような質問を大和は沈黙で肯定した。

千冬もどう言葉を掛けるべきか悩み視線を自分の足元に移す。

大和の両親は束がISを発表した後暫くして行方不明になった。現在も消息はわかっていない。

「・・・千冬さん、あまり深く考えないでください。あなたは俺より辛いでしょ？」

はつとしたように、顔を上げる千冬。

千冬と一夏は両親に捨てられた。

『捨てられた』それだけ見れば大和より辛いかもしれない。

「・・・話を戻そう。」

バツが悪そうな顔をしながら千冬は言った。

「もう誰も失いたくない、それだけです。」

「……。」

「誰も失わないように、仲間を、大切な人を守るために、そのために強くなつたんです。」

千冬の顔をまつすぐ見て大和は答えた。

「……わかった。だが、力の使い方を間違えるなよ？」

「わかっています。」

そうか、と言い千冬はドアの方へ歩いて行った。

ドアを開けたとき、何かを思い出しのように大和の方へ顔を向ける。

「学園の理事会からの要請だ。ISの実習の際お前は講師をするようにとのことだ。」

「……了解。」

大和の返答を聞き、頼むぞ、と言って千冬は屋上を後にした。

それぞれの思い（後書き）

大和と他のキャラの絡みが少ないですね。
改善していきたいです。

ご感想、ご指摘があればコメントしてください。

久しぶりの実家

「・・・ただいま。」

大和の言葉に返答する人は誰もいない。

彼は今自分の生まれ育った家に戻って来た。

生活に必要な最低限の家具しかない殺風景な内装である。

（誰もいるわけないか・・・。）

大和の両親は今も行方不明である。

親戚付き合いも全くなかったので幼い彼を引き取るような親戚は少なく、施設で過ごすことが多かった。

廊下を進みある部屋に入った。

そこは書斎のようで机と沢山の本が並んでいた。

その一角の本棚から一冊の本を抜き取り、本を開く。

本を開くと中は電子端末になっていた、その端末に15桁の暗証番号を入力する。

ガゴンッ！！

先程の本が置いてあった本棚が動く。

本棚が動くとそこにはエレベーターの入り口があった。

大和がエレベーターに乗ると家中の鍵が自動的にロックされ、セキュリティレベルが『最高』に引き上げられる。

エレベーターは下にどんどん降りていく。

しばらくするとエレベーターは止まった。
エレベーターから出るために20桁の暗所番号を入力する。
入力が終わると扉が開く、目の前には無機質な廊下が奥に続いている。

廊下を10メートルほど進むと大きな扉に突き当たった。
扉の横にある端末に30桁の暗証番号を入力し、虹彩認証、静脈認証を行う。

——カタギリ ヤマト ニンショウシマシタ——

無機質な音声のあと目の前の扉が開く。

そこは大小様々な機械とモニター、廃棄されたIS関連のパーツが
所狭しと並んでいた。

ここは大和のプライベートな研究所。
動いている機械は閉鎖された両親の務めていた研究所から拝借（決して盗んだわけではないよ！！）したものや、自分が作成した物、
調達した物だ。

大和が入ってくると、5つの人影が彼に近づいてくる。

「俺のことはいいから作業に戻ってくれ。」

大和の言葉に5つの人影は自分の持ち場に戻っていた。
さっきの人影、形は人なのだが人ではない。
大和が作った半自律可動型の人型のロボット。

外見はタ ミネーターそのものだ。
行っている研究が世界のパワーバランスを崩しかねないものが多い
ため、機密保持のためロボットが作業しているのだ。

大和は部屋の奥に進む。

すると、また扉があつた。今度は特にロックは掛かっていない。

大和は扉を開き部屋に入った。

大和の入った部屋こそが大和の研究室。

「さて……。」

大和はそう言いながら、部屋の3分の1を区切っているガラス窓付きの壁の向こう側へある作業台に、先日襲撃してきた無人機のGNドライブを置いてそこから出てくる。

ちなみに、はめられているガラスは特注の分厚い防弾ガラスだ。

「とりあえず分解するか……。」

そう言いながら、6本のアームを作業台に近づける。

アームはすべて脳量子波によってコントロールされている。

一つ一つ丁寧に分解し、中心となるパーツを探す。

分解中の様子は異なる複数の地点からカメラが記録している。

解析は思ったより早く終わった。

中心となるパーツはすぐに見つかり、ブラックボックスの解析も問題なかった。

「ずいぶんお粗末なものだったな……。」

組み立てなおした無人機のGNドライブを見ながら、椅子にふんぞり返って座っている大和が言った。

結果を言えば、大和が作った擬似GNドライブをより簡素化したものだった。

擬似GNドライブは外部から与えられたエネルギー量分のGN粒子を生み出す機関だ。

無人機のGNドライブは単位時間あたりに生成する粒子量は大和の作った擬似GNドライブより多いが、エネルギーと粒子の変換効率が悪く稼働時間も大和の作ったものの半分以下だった。

それでも、このGNドライブを搭載したISは、現行のISよりもすべての面で性能が上だ。

（専用機を持っている一夏やセシリア、鈴でも厳しいな……。）

そう思いながら、大和は先日 of 無人機の戦闘の録画を見ている。

「この太陽炉が改良され稼働時間が伸びたら、確実に驚異だな……量産化されたらなおのことだ。」

そう言つて、録画映像を終了する。

「やはり、急ぐしかないか……、『ケルベロス』の完成を……。」

大和はつぶやきながらその機体の設計図と、装備がリストアップされているモニターに目を移す。

「あとは、ケルベロスのために新造した新型GNドライブが到着すればいいんだが・・・。」

今度は別のモニターに目を移す。

「完成はしてるが、到着は今年の臨海学校前後か・・・。」

そのモニターには到着予定日と、新造されたGNドライブの現在地を示す地図が表示されていた。

「一週間も外出許可はいらなかったな・・・。」

大和はひとりごとを言いながらキッチンで食事をしている。

両親が失踪した後に入った施設で大和は家事を手伝っていた、そのため料理は得意な方だ。

（久しぶりに撫子の料理が食べたいな・・・。）

そんな事を思いながら一人黙々と夕食を食べる大和。

ソレスタル・ビーイングに所属させられる前は撫子と二人で世界中を旅していた。

その道中、どんなに不味い食材でも美味しい料理に生まれ変わらせていたのが撫子だ。

♪~~~~

夕食が終わった頃に電話がかかってきた。

千冬からだ。

要件はだいたいわかる。

「はい。」

「解析はどうだ？何かわかったか？」

大和の予想通りだった。

「解析は終わっています。いま、報告書を作成しているところです。学園に帰った際に提出します。」

「そうか。早いな。」

千冬は少し驚いたような声で返答した。

「一週間の外出許可を頂きましたが、明明後日のSHRまでには学園の方に帰ります。」

「・・・報告書の提出は一週間の外出の後で構わないが？」

千冬としては先日の戦いの労をねぎらうつつもりでも出した許可なので、ゆっくりして欲しいのだ。

「いえ、任務がありますから。」

本来の任務があるため用が済み次第、そつち任務に戻らなければなら
ない。

「・・・そうか、わかった。ああ、撫子から伝言だ。『お土産よろしく』だそうだ。」

「了解です。伝言、ありがとうございました。」

そう言つて、大和は電話を切つた。

「お土産、ね・・・。」

大和は苦笑いしながらIS学園のある方を向いた。

久しぶりの実家（後書き）

急いで書いたので誤字脱字が多いかもしれません（汗
ありましたら、ご指摘下さい。

動き出す黒幕（前書き）

だいぶ間があきました。
久しぶりの投稿です。

動き出す黒幕

「結局、投入した3機が全て戦闘不能！しかも、その内1機はあ^学ちに回収されるし……。どうするんだ！？」

薄暗い部屋の中で一人の女性が声を荒らげている。

「……………」

「どうするんだって俺は聞いているんだけど！？」

話しかけられているのに返答せず黙々とキーボードを打つ女性に再度問いかける。

「……何もしない。」

「はあ！？」

「私は何もしないと言ったんだ、オータム。」

そう言いながら、女性はキーボードを打つ手を止め『オータム』と呼ばれた女性のほうを見る。

「何もしないってツ！？テメエ、何か次の手でもあるのかよ！？M！？」

オータムは『M』と呼んだ女性から、自分の思ってもいなかった返答に声をさらに荒らげる。

「やられたままでいいのかよ！？」

「オータム、勘違いするな、私は今は何もしないだけだ。」

「今は？」

「そうだ。」

Mの発言によってオータムの声から荒荒しさが薄れた。
Mは続ける。

「先の戦闘データから新しい機体を製作中だ。」

「それを早く言えよ!!」

「お前が聞かなかっただけだ。」

オータムとの会話を打ち切り、またキーボードを打ち始めるM。
その後も二人は今後について話し合っていた、と言えば聞こえは言いが実際はMがほとんど話を進め、オータムがそれに相槌を打っているだけだったのだが。

「期待してるぜ!!」

最後にそう言いながらオータムは部屋を後にした。

「あの博士から強奪した無人ISを解析して、私が産み出した『GNドライブ』搭載型無人IS……。こうもあっさりとやられるとはな……。」

オータムが出て行った後、独り言をいうM。

「この借りは必ず返させてもらう……。」

そう呟き、Mは無人IS『ジnkスI』から送られてきたヴァーチエの姿を映したモニターを、食い入るように見つめていた。

「頼んでおいた新装備はどうなった？」

場所は変わり、大和の個人研究室。

「既に完成しています。」

「そうか、ご苦労。」

「インスツールは？」

「自分でやる。後で俺の部屋に置いておいてくれ。」

「了解。」

この会話は大和の作った半自立可動型のロボットとしていた。

世間には公表していないが、大和はA Iも作っていた。

ただ、会話まで出来るとは思っていなかったので、初めてしゃべりだしたときは製作者である大和自身驚いた。

（例の装備を追加すれば、新型G Nドライブが届くまで、とりあえず戦力の増強になるな……。）

そんなことを考えながら大和はキーボード上の手を忙しく動かしていた。

（しかし、あの機体ヴェーダの情報をもつてしても製造者を特定できないとは……。やはり、亡国機業が黒幕と考えていいだろう。
ファントム・タスク
しかし、どこでG Nドライブ関連の技術を手に入れた？ あれに関する技術はすべてヴェーダの最深部にしかないはず……。）

「まさか、ヴェーダが……？……いや、そんなはずはない……

。」

そんなことを呟きながら、大和は無人機に関する報告書を書いていった。

ふと、大和はキーボードを打つ手を止めた。

「撫子への土産、どうしよ……。」

大和は真剣な顔で悩んでいた。

動き出す黒幕（後書き）

今回は少し短いです。

ご指摘、ご感想があればコメントしてください。

転校生2名様入ります（前書き）

連日の更新です。

最近お気に入り登録が増えて嬉しいです！！
これからも頑張ります！！

転校生2名様入ります

時間は進み、大和は千冬へ伝えた通りにIS学園へ帰ってきた。
今はHRの前だ。

「久しぶりだな！！大和！！」

「久しぶり、と言うが私は3日しか休んでいないが・・・。」

一夏のいかにも当然あっています的な挨拶に、事実を伝える大和。

「そうか？俺は結構会^{出番がなかった}っていない気がするが・・・。」
「そんなことはない。」

一夏は複雑な顔をしながら、腕を組んで考えている。

「織斑君達のISスーツってどのやつなの？」

そんな時、クラスの女子から話しかけられた。

「俺のは特注品だって、どこかのラボが作ってるらしいよ。元はイングリッド社のストレートアームモデルだって聞いている。」

へえ〜と集まってきた女子は一様に答える。

「じゃあ、片桐君のは？」

「自分で作った。」

「「「「「・・・は？」「「「「「」

いつの間にかやってきた、箒やセシリアも含めた周りの女子が固まった。

「大和、どういう事だ!？」

箒が声を荒らげて聞いたです。

「というか、大和さんには少し不可解な行動がありますわ!!その辺を含めて説明して欲しいですわ!!」

セシリアも聞いたです。

鈴は今日はいないようだ。

箒、セシリアは大和がソレスタル・ビーイングに所属しているのは知っているが、それ以上のことは知らない。

もちろん、一夏もだ。一夏、鈴に至っては大和がソレスタル・ビーイング所属とも知らない。

そんな状態でも大和はいつもと変わらず。

「・・・そろそろ織斑先生と山田先生達が来るぞ。」

と言っ。

「ん?もうそんな時間か・・・。」

納得いかない顔をしながらも、一夏達はそう言って自分の席に戻った。

クラスメイトも納得のいかない顔をしながらも、織斑先生の出席簿アタックが怖いため席に戻った。

この時一夏達は気付いていなかった。大和があえて『達』と付けた理由を。

「今日は転校生を紹介しまゝす!!」

織斑先生は今日から本格的なIS実習訓練を始めると告げた。

ISスーツを忘れたら学校指定の水着らしい。それも忘れたら下着だそうだ。

（（それはないなゝ・・・。））

それだけは勘弁してほしいと思う大和と撫子だった。

千冬からHRを引き継いだ真耶がいつもの調子で話し始める。

「皆さん、驚かないでくださいね？では、入ってきてください!!」

そう言い、真耶は教室の入口の方へ顔を向ける。

「失礼します。」「・・・・・・・・。」

今までざわついていた教室が一瞬で静かになる。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。よろしく願います。」

そう言つて一礼し、にこやかな顔をクラスに向ける。

「お、男・・・？」

「はい。こちらに」

本人は男だといい、服装も男性用の制服だ。
しかし、大和と撫子が捉えたシャルル・デュノアの脳量子波は女性特有のものだった。

脳量子波レベルの低い人や、レベルが高くても扱いが拙い人のそれは性別などがはつきりしやすい。

その上、感情、思考も読み取りやすいのだ。

『何か訳ありのようだな……。』

『そうみたいです。』というか、もう気づいてるんでしょ？』

『……何のことかな？』

脳量子波で会話する二人、その時。

「きゃ……………」

「はい？」

『これは……。』

『ええ……。』

脳量子波で一言つつ交わした二人は驚くほどの早さで耳栓をし、両手で耳を塞いだ。

「……………きゃあああ……………！！！！」

「男子よ三人目の男子！！」

「しかもうちのクラス！！」

「美形！守ってあげたくなる系の！！」

『バカな！？耳栓をした上に両手で塞いでいるんだぞ！？それなの

に、なんでここまで響く!?!」

『年頃の女の子をなめてはいけませんよ、ヤマト。』

そんな会話を交わしていると、千冬が口を開く。

「騒ぐな! 静かにしろ!」

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介は終わってませんか!?!」

真耶も続ける。

その言葉を聞いた大和と撫子がもう一人の転校生に視線を移す。

その視線に気づいたのか、もう一人の転校生が大和と撫子の方を見る。

その転校生は一瞬少し驚いた顔をしたが、すぐに視線を戻した。

「・・・挨拶をしろ、ラウラ。」

「はい、教官。」

『いきなりボ口を出すなよ・・・。』

『・・・』

「今はお前の教官ではない。ここでは織斑先生と呼べ。」

「はい、教官。」

『・・・わざとだろ(でしょ)。』

大和と撫子の脳量子波の会話がハモった。

そして、『ラウラ』と呼ばれ転校生は背筋を伸ばし自己紹介を始めた。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ。」

「「「「・・・・・・・・・・」」」」

みんな続きを期待し、沈黙する。
しかし、いつこうに続きを言おうとしないラウラ。その沈黙に耐えかねたのか真耶が口を開く。

「あ、あの・・・、以上・・・ですか・・・？」
「以上だ。」

クラスが啞然としている中。

『アイツらしいな。』
『そうですね。』

妙に納得する大和と撫子だった。

ふと、ラウラは一夏の傍に近づいていく。

『！？撫子！』
『わかってます！』

ラウラが一夏の頬を叩こうとした。

刹那

撫子のヘアバンドがラウラの手にあたった。
ラウラが驚いた顔をして二人の方を見る。

「何をしている？」

そんな事を言っているような目をして、二人はラウラの方を見ていた。

ラウラは自分のしようとしたことを思いとどまり、一言だけ一夏に言った。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか！」

それを聞いた一夏はしばらく呆然としていたが、千冬の声によって我に帰った。

撫子の実力

「今日は2組と合同でIS模擬戦を行う。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合！解散！！」

ラウラが意味不明な言葉を一夏にいい、呆然となったクラスへ千冬は手を叩いて行動を促す。

「織斑。デュノアの面倒を見てやれ。寮の部屋もお前と同じだ。」

一夏の傍まできて千冬が話しかける。

一夏と箒は同室だったが、大和が学園を離れていた3日間の間に別室になったらしい。

「君が織斑　一夏君？初めまして。僕は・・・。」

「自己紹介はあとだ！！とりあえず・・・、大和！」

シャルルが自己紹介しようとするのを一夏は止め、大和に声をかける。

「片桐君ならもう出ていったよー！」

「な！？薄情者め！！」

すでに教室に大和の姿はなかった。

シャルルの手を引き一夏は急いで教室を出た。

この時、シャルルは顔を赤くしていた。

IS実習の為にISスーツに着替えるのだが、女子は教室、男子は空いているアリーナの更衣室で着替えなければならない。

そんな事をアリーナの更衣室へ移動しながらシャルルへ説明する一

夏。

（しかし、変だな……。なんで今日は人がいないんだ？）

アリーナの更衣室へ移動中、一夏は珍しく生徒にほとんど会わなかった。

アリーナの更衣室に着き一夏とシャルルはお互いに自己紹介する。

「改めて、よろしくな！」

「僕の方こそ、よろしく！」

二人の自己紹介が終わった頃、何食わぬ顔で大和が更衣室に入ってきた。

「大和！先に教室に出てただろ！？なんで俺達より遅かったんだ！？」

「・・・女子生徒達に追いかけていた。多分、学園のほとんどの生徒に追いかけていたと思う・・・。」

それは災難だな、という顔で二人は大和の方を見ていた。

「自己紹介がまだだったな。私は片桐 大和だ。好きに呼んでくれ。」

「僕はシャルル・デュノア。シャルルって呼んで。」

「わかった。」

大和とシャルルが互いに自己紹介したあと、シャルルが何気ない質問をした。

「大和もISを動かせるの？」

「・・・ああ。」

「大和の操縦技術はすごいんだぜ！」

「へえ、そうなんだ。見てみたいな。」

単純な好奇心の目で大和を見るシャルル。

「ところで、二人とも着替えないのか？」

「あ、ヤバ！！時間が！！」

そう言いながら一夏は着替え始める。

その姿を見たシャルルは顔を赤くし、すぐに後ろを向いて自分も着替え始めた。

（その調子では正体がバレるのも時間の問題だな・・・。）

そう思いながら、大和もシャルルから見えないように着替え始めた。

一夏達がグラウンドに着いてしばらくすると、教員用ジャージを着た千冬がやってきた。

「では、本日より格闘及び射撃を含む実践訓練を開始する。」

「織斑先生！質問です！」

千冬が授業の開始を告げた直後、一人の女子生徒が拳手しながら質問する。

「何だ？」

「どうして片桐君は織斑先生のとなりに立ってるんですか？」

そう、大和も教員用ジャージを着て千冬の隣に立っていた。

「その事か。知っている者もいるだろうが、片桐のIS操縦技術は教える必要がないレベルだ。だからと言って、授業に出なくてもいい理由にはならないので、IS実習では講師として参加することになった。」

「織斑先生、『教える必要がないレベル』は言い過ぎです。」

千冬は大和の声が聞こえているが無視し、話をすすめる。

大和が一夏達より早く教室を出た理由は、職員室へ教員用ジャージを取りに行くためだった。

「まずは戦闘を実演してもらおう。凰、オルコット。専用機持ちならすぐに始められるだろう。前に出る！」

「めんどいなあ、なんでアタシが・・・。」

「こういつのは見世物のようで気が進みませんわ・・・。」

そんなことを言いながら二人は前に出てくる。

「——————」。

千冬は二人の耳元で何かを呟いた。

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね！」

「アタシの実力の違いを見せるいい機会よね！」

千冬はニヤリと笑って二人を見る。

「乙女の心を利用するとは……。」

「なにか言ったか？大和？」

「……いえ。」

二人に何を言ったか聞こえていた大和は、千冬に聞こえないよう呟いたつもりだったが、聞こえていたようだ。

「それで、相手は鈴さんですか？わたくしはそれでも構いませんが・・・。」

「ふふん。のぞむところよ。返り討ちにしてあげるわ！」

「慌てるな馬鹿共。対戦相手は……。」

千冬がそこまで言っただけから甲高い音が響いてきた。

キィイン

「あわわわあ！ど、どいてくださいー！」

そんなことを言いながら真耶が空から落ちてきた。

そして、一夏の方に文字通り落ちた。

その後はちょっとした修羅場だった。

落ちてきた真耶を一夏は白式を展開して受け止めた。

かに見えたが、実際は受け止めきれずグラウンドをゴロゴロと転がった。

砂埃がやむと、偶然なんだろうが真耶の胸を揉んでいた。

それを見たセシリアは額に青筋を浮かべながら、『スターライトm

k I I I』を一夏に向けて放ち、同じく額に青筋を浮かべた鈴も『双天牙月』を投げていた。

「どわー!!」

セシリアの攻撃をなんとか避けた一夏だが、鈴の攻撃を避けるのは間に合いそうにない。

ドンッ!ドンッ!

2発の銃声がグラウンドに響く。

「・・・撫子か。」

「ほう・・・。」

大和が呟き、千冬が感心したような声を出す。

撫子はISを展開し、『GNスナイパーライフルI I』で『双天牙月』を撃ち落としていた。

一夏は現状をよく理解していないせいか、呆然としている。

第やセシリア、鈴はもちろん、クラスの女子全員が目丸くしていた。

山田先生も同じだ。

「織斑先生、続きを。」

「ん? ああ、そうだな。」

撫子が授業をすすめるよう千冬に促す。

「凰、オルコット。お前たちの相手は山田先生だ。さあ、始めろ!」
「「「は、はい!!」」」

我に帰った三人が空へ飛び上がる。

「大和、どう見る？」

三人が飛び立ったあと、千冬は大和に話し掛ける。

「山田先生の実力がわからないのでなんとも言えませんが・・・。」

「確かにそうだ。だが、ISの操縦だけを見てどうだ？」

「そうですね。山田先生の方が動きに無駄がないですね。」

「ほう。」

「相手の動きを見るのも得意なようです。」

大和がそう言うと、空中で二人がぶつかった。

その場所に真耶はグレネードを打ち込む。

セシリアと鈴は無様に地面へ墜落した。

「ぐぐぐぐつ・・・！！」

「ぎぎぎぎつ・・・！！」

地面に墜落した二人はいがみ合っていた。

それを無視して千冬は続ける。

「山田先生は元代表候補だ。この程度造作も無い。これで諸君たちも教員の力がわかっただろう？以後、敬意を持って接するように！」

「・・・はい！！」「」「」

元気の良い返事が帰ってきたあと、千冬は続ける。

「しかし、これでは戦闘の見本にならないので別のヤツにもやってもらおう。」

「お、織斑先生！？な、何言ってるんですか！？」

真耶がいつものどおりの慌てた顔になる。

「か、片桐君を相手にしろとかいいませんか！？」

「大丈夫だ、山田君。そんな事すれば一瞬で戦闘が終わるのは目に見えてわかる。」

「……………」

大和はいつも通りポーカーフェイスだが、内心苦笑いだった。真耶は事実なのだが、ストレートに言われてかなり凹んでいる。

「じゃ、じゃあ誰が相手を？」

「……撫子、でしょう？」

真耶が千冬に改めて質問すると、大和が口を開いた。

「察しがいいな、片桐（♂）。」

「その呼び方はやめてください。」

「そういう事だ、山田先生。」

「無視しないでください。」

「か、片桐さんも十分強い気がするんですが……。」

千冬に抗議する大和だが千冬はそれを無視し、撫子に模擬戦をするよう指示する。

真耶も何か呟いたようだが、大和にも千冬にも聞こえなかった。以前、ソレスタル・ビーイングでの撫子の階級を聞いた真耶は、撫子の力量をある程度予測していた。

「い、行きます!」

「・・・・・・。」

撫子がISを展開したあと、真耶と撫子は上空へ飛び、千冬の合図で模擬戦が始まった。

「・・・・セシリア。」

「?何ですか?大和さん?」

「撫子の戦いをよく見ておけ、あれが射撃タイプの戦闘だ。」

戦闘が始まってすぐ、大和はセシリアに話しかけた。

はあ、とだけ言ってセシリアは二人の戦いを見た。

真耶はさっきの戦闘と同じく、ライフルで攻撃しながら接近していく。

撫子はそれを回避しながらアサルトライフルで反撃する。

反撃を受けた真耶はシールドで防ぎながら一旦距離を取る。

撫子はアサルトライフルをクローズし、右肩にマウントしてあったGNスナイパーライフルをライフルモードで装備。真耶に狙いをつける。

「そんな状態では反撃されますよ!」

そう言いながら真耶はアサルトライフルで反撃する。

ライフルの反撃を躲しながらも、GNスナイパーライフルのスコップから目を離さず狙いを付け撃つ。

撃っている弾数は真耶の方が上なのだが、シールドエネルギーの減

る量は撫子の方が少ない。

「・・・シールドピット展開。」

その掛け声と共に、撫子のIS『ケルディム』の各所に取り付けてあるGNシールドピットが展開される。

9基あるシールドピットのうち2基を自身の防衛のため手元に残し、残りの7基を真耶の方へ向かわせる。

「あれは、わたくしのブルー・ティアーズと同じ兵器・・・？」

「・・・似たようなものだな。」

セシリアの質問に答える大和。

しかし、セシリアよりもピットの操作が上である。

撫子の脳量子波で基本的には操作されているが、ヴェーダによる補助もあるためだ。

もつとも、ヴェーダの補助なしでも撫子の操作の方が上なのはここだけの話。

シールドピットによる攻撃とスナイパーライフルからの攻撃で、真耶のシールドエネルギーはほとんど削られる。

「くっ・・・！」

真耶の顔に焦りが見え始めた。

今のところ、真耶は撫子にたいしたダメージを与えておらず、逆に自分のシールドエネルギーは残り少ない。

「・・・シールドピット、アサルトモード。」

撫子が止めを刺すために動いた。

4基のシールドピットを格子状に配置し、強力なビームを発射する。それを避けようとした真耶に撫子はGNスナイパーライフルをバルカンモードにし、連射。

全弾命中し真耶のシールドエネルギーはゼロになった。

撫子の実力（後書き）

あまり登場しない撫子を目立たせてみました。
自分としては結構自信作なんですが・・・。

感想があればお願いします。

グループ学習

「これが、専用機持ちの力……。」

真耶と撫子の模擬戦が終わったとき、箒は誰にも聞こえないよう呟いた。

その独り言を大和は聞き逃さなかった。

「強いですね。片桐さん!!」

「いえ、山田先生こそ中々の實力をお持ちで。」

互いに讃え合いながら降りてくる二人。

「いい手本になった。二人ともご苦労。」

千冬も称賛する。

「では、グループに分かれて実習を行う。織斑、オルコット、片桐、デユノア、凰、ボーデヴィツヒの専用機持ちがグループのリーダーを務める。いいな？」

千冬が指示を出す。

「私はグループを回ってアドバイスをすればいいんですね？」

「そうだ。任せたぞ。」

千冬の指示によって生徒達がグループにわかれ始めた時、大和は確認のために千冬に聞いた。

「了解。」

「それと、アイツのことも・・・。」

そう言つて、千冬はラウラの方に視線を移す。

「・・・了解。」

ラウラの方をチラリと見て、めんどくさそうに返答した大和だった。

（とりあえず、一夏のグループから見るか・・・。）

そう思いながら行動を開始する大和。

「おう！大和！なんか用か？」

「ああ、各グループを回つて、アドバイスをしよう織斑先生に頼まれたのだ。」

「お前も大変だな・・・。」

「気にするな・・・歩行までやっているのか？特に問題はなさそうだな。」

「ああ。」

また来ると言つて、大和はセシリアのグループへ向かった。

「あら、大和さん。いらつしゃい。」

「順調か？セシリア。」

「はい！問題ありませんわ！」

元気に答えるセシリアだが、グループの他の生徒は違った。

セシリアの理論整然とした説明について行けず、頭を抱える生徒が

ほとんどだった。

それらの生徒のために、大和が噛み砕いて再度説明したのは言うまでもない。

「セシリアのグループもISの歩行までやってくれ。」

「わかりましたわ・・・。」

さつきよりも明らかに元氣のない声で返答するセシリアだった。

大和はシャルルのグループへ向かう。

「ここは問題ないな。」

「あ、大和！おつかれ！」

大和の声に気付いたシャルルが大和の方を向き、笑顔で答える。
その後すぐにグループの女子たちの方に向き直り、熱心に説明していく。

「・・・シャルルは教えるのがうまいな。」

「エヘヘ。そうでもないよ！」

大和の独り言が聞こえたのか、振り向いてハニかんでいた。
照れているのか少し頬が赤い。

その調子で頼む、と言い大和は鈴のグループへ向かう。

「問題ないか？ 凰？」

「大丈夫よ！それにアタシのことは鈴でいいわ。」

「わかった。しかし、どんな説明も『感覚でわかる』は良くないな。」

「うっ！」

鈴の顔が曇る。

「それ以外は問題ない。歩行までやってくれ。」

「わかったわ。」

あとでまた来ると言い、大和は次のグループへ向かった。
そう、次のグループは・・・。

(・・・参ったな。)

その惨状を見て大和は目眩がした気がした。

沈黙

その一言で表せれる。

「何をしている？ラウラ。」

「お久しぶりです。片桐じゅん・・・。」

言い終わる前にラウラの口を抑える大和。

グループの女の子達は大和の行動に疑問を感じつつも、救いが来た
という表情をしている。

「あれ？片桐君はボーデヴィッヒさんと知り合いなの？」

グループの女子から質問される。

「まあ、少しな。」

そう言いながら言葉を濁す大和。

この二人の関係は別の機会で話すことにしよう。

「ラウラ、君はグループのリーダーなんだろう？だったら、なぜ教えてあげない？」

「こんな小娘たちに教えることなどありません。」

「教官の指示には従えない、と・・・。」

その言葉を聞いたラウラが驚いた顔をして大和を向き、睨む。

「そ、そんなことはありません!!」

「なら、グループの娘たちに教えてあげるんだ。」

「っ!・・・わかり、ました。」

ラウラは渋々説明を始めた。

(ここは要注意だな・・・。)

そんな事を考えながら大和は撫子のグループへ向かう。

「撫子。」

「なんですか？ヤマト。」

「少しスパルタではないか？」

グループの女の子たちは地面に手について息を切らしている。

「そうですか？」

「そうだ。だいたい、なぜ走らせているんだ？他のグループは歩行までだ。」

「お言葉ですが、走るのも歩くのもたいして変わらないと思いますか？」

「いや、全く違うものだからね？やつと立ち上がった赤ん坊に走れ
て言ってるのと同じだ。」

「この娘たちは赤ん坊ではありません。」

「・・・君ってそんなキャラだったか？」

久しぶりの登場に撫子のテンションはおかしいようだ。

「スパルタも結構だが、今日は歩行までいい。」

「・・・了解しました。」

撫子は渋々了承した。

一通り見て回った大和は千冬に報告する。

「どうだった、片桐？」

「はい。織斑先生の思ったとおり、ラウラのグループは要注意です
ね。」

「そうか・・・。」

「どこか生徒を見下したところがあるので、今後トラブルを起こ
す可能性があります。」

「わかった、織斑のこともあるが、ボーデヴィツヒのことも少し気
に掛けてやってくれ。」

「構いませんが、ラウラに何を吹き込んだんです？」

「ん？まあ、ちょっとな・・・。」

バツが悪そうな顔をして、言葉を濁す千冬。

その表情と千冬の思考から大和にはわかっているのだが。

「ええ〜!？」

「いいな〜!」

「私も私も!!」

「ん？」

一夏のグループが騒がしいので、そちらの方を向く大和。

「何をしているんだ？一夏は？」

そこには箒をお姫様抱っこしている一夏がいた。

グループ学習（後書き）

学校の都合で今後は週一での更新になると思います。
申し訳ありません。

早く書き上げればその都度更新していきます。

昼休みと放課後 前編（前書き）

遅くなりました。

やっぱり週一の更新が限界ですね・・・。

昼休みと放課後 前編

「どういう事だ？一夏？」

時間は進んで昼休憩。

場所は移って屋上。

箒は不満がこもった声を一夏に向け、睨んでいる。

「いや、食事をするなら人数が多いほうが楽しいと思って。」

今、屋上には一夏と箒以外にセシリア、鈴、シャルルがいる。

「僕はお邪魔だったかな？」

「そんなことないぜ！男同士仲良くしようぜ！」

シャルルの言葉を一夏が否定する。

シャルルは苦虫を噛み潰したような顔を一瞬したが、すぐにいつもの笑顔に戻った。

「ところで、大和さんと撫子さんは？」

「そうそう、あの二人がいないじゃない。」

セシリアと鈴が一夏に聞く。

「誘ったんだけどな、なんか二人とも用事があるって。」

用時があるのなら仕方がないと言って二人は引き下がった。

「一夏、大和と片桐さんはいつも一緒にいるの？」

「そうだな、だいたいいつも一緒にいるな。」

「ふーん。」

「それよりも、飯にしようぜ。」

一夏の一言で五人は昼食を始めた。

時を同じくして、人通りの少ないIS学園内のベンチ。

「お久しぶりです。片桐准将、片桐中佐。」

ラウラは敬礼しながら二人に挨拶する。

「久しぶりだなボーデヴィツヒ少佐。1年？いや2年振りか。」

「はい。」

「ここは軍ではないからな。わかっていると思うが、階級を言うのはやめてもらおうか？」

「は！」

そう言いながら、再度敬礼するラウラ。

「敬礼もいい。大和と呼んでくれて構わない。」

「私も撫子で構いませんよ。」

「しかし……。」

ラウラが困惑した顔をしている。

「まあ、いい。好きに呼んでくれ。それに、私たちが『ソレスタル・ビーイング』に所属していることは隠している。知っているものは

「ごくわずかだ。これからそのことはなるべ伏せていきたい。」
「・・・わかりました。」

ラウラは渋々承諾した。

「ところで、朝の行動はなんだ？」
「そ、それは・・・。」

大和からの問に言い淀むラウラ。

「まあ、なんとなくわかるがな。・・・織斑先生絡みだろう？」
「！？私の思考を！？・・・さすがです、『イノベーター』。」

イノベーター

脳量子波レベルが高くそれを自在に扱え、高い身体能力を持つ人間のことをいう。

もともと、イノベーターという単語はソレスタル・ビーイング内だけで用いられているのだが。

「ラウラの脳量子波は以前よりも強くなっている。だが、扱いは相変わらずだから読み取りやすい。」

「大和殿のように自在に扱える人はそうそういないと思いますが・・・。それに、私自身脳量子波がよくわかりません。」

脳量子波はIS委員会の研究施設が研究を進めている脳波の一種だ。未知の部分が多く、どういったものなのかは未だに謎だ。

ラウラの脳量子波は他の人に比べれば強いのだが、大和や撫子からすれば他の人と大差ない程度である。

「まあ、たしかに脳量子波は未知の部分が多いからな。私にもわか

らないところがある。」

（・・・嘘つき。）

大和の言葉を心のなかで否定する撫子。

IS委員会には報告していないが、大和は脳量子波の全容をかなり前に解明していた。

「話を戻すが、あまり一夏を責めるな。本人もそのことで気にしている。」

そのこととは千冬がIS世界大会の2連覇を逃したことだ。
モンド・グロツン

第2回モンド・グロツン決勝当日に一夏は何者かに誘拐された。

一夏の監禁されている場所をいち早く調べ、知らせたのがドイツ軍だ。

幸い一夏は無傷だったが、千冬は一夏を助けに行くために決勝を棄権せざる負えなかった。

この事件は一般には表に出ていない。

「・・・・・・・・。」

ラウラは無言で、納得しないという顔をしている。

「・・・まあ、自分の思うように行動すればいいさ。」

「！？ヤマト！？」

撫子が大和の言葉に驚き声を上げる。

「自分が納得する結果が得られなければ、それに縛られたままだ。」

「大和殿・・・。」

「間違った方へ進んだ時は私や撫子が叱ってやる。」

「・・・ありがとうございます。」

そう言ってラウラは腰を90度に曲げ礼をした。

「人生悔いを残さないようにな・・・。」

そう言った大和の表情はいつもと変わらずポーカーフェイスだったが、どこか悲しそうだった。

その表情の変化に気づいたのは撫子だけだ。

「話は変わるが、私の呼び方は『大和殿』になっただんな・・・。」

「ご迷惑でしたか？」

「いや、好きに呼んで構わないと言ったのは私だ。問題ない・・・」

ちなみに、撫子は？ラウラ？

「『姉さん』ですが？」

「・・・そうか。」

なぜラウラが撫子のことを『姉さん』と呼ぶのかは別の機会にしよう。

場所は変わって屋上

食事中に一夏がセシリアの作ったサンドイッチを食べたことにより、走馬灯を見たのはここだけの話。

一夏曰く、「あれは食べ物じゃない。兵器だ。」だそうだ。

「やっぱり、大和と撫子って謎が多いよな・・・。」

「・・・謎？」

昼食を終えた一夏達は、午後の授業が始まるまで屋上で談笑してい

た。

そんな時、一夏は何かを思い出したように口に出した。

「そっか、シャルルは転校してきたばかりだから知らないか……。」

「

「どんなところが謎なの？」

「まあ、結局のところ何も知らないだよ、あの二人のこと。」

「え？」

「そうだな。あの二人は自分達のことを話さないからな。」

一夏の言葉を肯定し、付け加える筈。

「一番の謎が大和について何も報道されていないってことだ。」

「確かにそうだね。僕もこっちに来てから初めて知ったし。」

「そうですわね。」

「確かにそうね。」

大和が表の世界に出ないのはIS委員会による報道規制もあるが、ヴェーダによる情報操作も関係している。

何度もいうが、大和のISは正しくはISではない。

IS委員会としてはISに匹敵する性能を持つ新しいものが表に出て、世界を混乱させるのを防ぎたいという思惑があったためだ。

「男性IS操縦者なら色々と報道されるのにな。」

「だろ？ 筈。俺も入学前とか取材がすごかったもんな……。」

「そういえば、シャルルさんも転校するまであまり報道されていませんわね？」

「ふえ！？ ば、僕はフランスでは結構報道されてたよ？」

セシリアの問に少し焦りながら答えるシャルル。

「そうなの？」

「そうだよ、鈴。は、ははは・・・。」

シャルルはただ苦笑いするしかなかった。

放課後

シャルルは寮の自分の部屋でさっき言われたことを考えていた。

「いつかはバレル、か・・・。」

授業が終わり教室を出ようとしたとき、すれ違いざまに大和に言われた言葉だ。

時間はさかのぼり授業終了直後。

「ねえ、一夏。一夏っていつも放課後ISの訓練をしてるんだよね？」

「ん？ああ、そうだぞ、シャルル。」

「僕も参加していいかな？僕も専用機持ちだし、役に立つと思うんだ。」

「そうなのか！？歓迎するぜ！！」

ISの訓練はしているものの、箒やセシリア、鈴の説明では全くわからなかった一夏にとって、願ってもいない提案だった。

「ありがとう！早速だけど今日からいいかな？」

「ああ！問題ない！」

「じゃあ、先に行ってるね？場所は第1アリーナでいいかな？」

「大丈夫だ！俺も急いでいくよ。」

「わかった！」

そう言つてシャルルはアリーナの更衣室を目指し教室を出ようとした。

その時、ちょうど大和が教室に入ってきた。

「わっ！」

「すまない。驚かせたな。」

「だ、大丈夫だよ、大和。」

シャルルはいつもの笑顔で答える。

「あ、そうだ！大和も一夏の訓練に参加する？」

「いや、私は遠慮しよう。」

「そう……。」

少し残念そうな顔をするシャルルに、大和は小声で言った。

「いつかはバレルぞ。デュノアさん。」

「え！？や……、まと……？」

シャルルはぎよつとした顔をした。

「私が何か言つたか？」

「い、いや……。何も……。」

大和はいつもの声の大きさに戻し、そうか、とだけ言い自分の席に向かった。

その言葉を言われたシャルルは一瞬だけ動揺したが、気持ちを入れ替えて一夏の訓練に参加した。

そして、今に至る。

一夏は用事があるから、と言って少し前に出て行った。

一夏が部屋を出たあと、シャルルは大和に言われた言葉のことをずっと考えていた。

（大和には気付かれてるんだ……。だったら、一夏も気付いてるのかな……。？）

そんなことを考えているとドアをノックする音が聞こえた。

「は、はい！誰ですか？」

「・・・大和だ。」

「や、大和……。」「

ドアの前で名前を聞いたシャルルはドアを開けるのを躊躇したが、覚悟を決めた。

ガチャ・・・

そこには当然だが大和が立っていた。

「・・・入っていいか？」

「う、うん……。」「

シャルルは大和を部屋へ通した。

昼休みと放課後 後編（前書き）

週一の更新で申し訳ありません。
では、続きをどうぞ！！

昼休みと放課後 後編

「・・・・・・・・。」
「・・・・・・・・。」

大和は現在一夏の椅子に座り、シャルルは自分のベッドに腰掛けている。

その状態で、しばらく沈黙が続いた。

時間にして1分ぐらいだったが、シャルルにとっては永遠かというぐらいの長さだった。

その沈黙を破ったのは大和だった。

「・・・・すまない。」
「え？」

シャルルは何に対して謝られたかわからないので素っ頓狂な声を出す。

「や、大和？何に対して『すまない』なのかな？」
「今日の放課後のことだ。」
「・・・・え？」

シャルルが大和の言葉に呆然としているが、大和は続けた。

「放課後のことは気にしないでくれ。私の勘違いだった。」
「え？え！？」
「本当に、すまない。」
「ち、ちょっと、大和？」
「そっという事だ、では失礼する。」

そう言つて、部屋を出ていこうとする大和。
それをシャルルが引き止める。

「い、意味が分からないよ！！急に来ていきなり誤つて！！大和はなにがしたいの！？」

「謝りに来たただだが・・・？」

「嘘だ！！僕の正体知ってるんでしょー！？」

シャルルが声を荒らげる。

「・・・なんのことだ？」

「誤魔化すつもり！？」

「・・・。。。」

大和はだまつてシャルルを見ている。

シャルルの顔は怒りで赤くなり、肩で息をしている。

「何とか言えよ！！」

そう言いながら、シャルルは大和の胸ぐらをつかんだ。

そして真っ直ぐ大和の目を見た。見たというより睨んでいる。

「君は何者なの！？」

「・・・。。。」

「何のためにここにいるの！？」

「・・・。。。」

「答えるよ！！」

「・・・。。。」

シャルルは大和を突き放し声を上げた。

幸い、部屋の外に聞こえるほどの声の大きさではなかった。

「・・・シャルル。」

未だに肩で息をしているシャルルに大和は口を開いた。

「確かに私は君の正体を知っている。なぜ転入したのかもだいたい見当がつく。」

シャルルは一瞬ビクつとなり顔を青ざめさせたが、すぐに表情を変え大和を睨んだ。

「だったら、どうする？僕を先生に突き出す？」

大和は首を横に振り、続けた。

「そんなつもりはない。」

「だったらなんで放課後、あんな事を言ったの!？」

「・・・お節介だ。」

「お節介!？」

シャルルの睨みが強くなる。

「そうだ。今の君は自分を偽っている。そんなことをしていると、いつか後悔するぞ。」

「・・・・・・・・。」

「後悔したくないなら、本当の自分を皆に話すべきだ。今でも罪悪感はあるんだろ？」

その言葉にシャルルは俯いてしまった。

確かに一夏達を騙し続けることに罪悪感はある。
このまま騙し続ければ将来、後悔することもシャルルはわかっている。

「・・・それは今すぐじゃないとダメかな？」

シャルルが重い口を開く。

「今すぐ話す必要はない。自分と向き合って決心がついたら話してくれ。それまで待っている。」

「・・・わか、った。」

シャルルが力なく答える。

「すまない。不快な思いをさせて。」

「・・・。。。」

「では、失礼する。」

大和はドアの方へ向かっていった。

「・・・大和。」

「何だ？」

呼び止められ、大和はシャルルの方へ体ごと向く。

「君は何者なの？」

「・・・。。。」

「答えられないの？」

「・・・。。。」

「大和って・・・、ズルイよね。」

「・・・・・・・・・・。」

「他人のことはなんでも知ってるのに、自分のことは何も教えないなんて・・・・・・・・。」

「・・・すまない。」

「じゃあ、僕が本当の自分のことを話したら、大和も皆に自分のことを話してね。」

シャルルは真剣な目で大和を見ていた。

「・・・わかった。」

「約束だよ！絶対だからね！！」

大和の同意にシャルルはいつもの笑顔で念を押していた。

「あ、大和？」

「なんだ？」

今度こそ部屋を出ようとドアの方に向かって歩き出した大和に、シャルルは再度呼び止める。

「その・・・、一夏も僕の正体は気付いてるのかな・・・？」

シャルルは恐る恐る尋ねる。

「いや、気付いていないだろうな。一夏^{あいつ}はいろいろと鈍いからな。」

シャルルの方に顔を向けず大和は答える。

大和の返答にシャルルはただ苦笑いするしかなかった。

「ただいま。」

「思ったより遅かったですね。」

寮の自室に帰った大和は自分のベッドに腰掛けた。

「シャルルに呼び止められてな。」

「そうですか。それで彼女・・・、彼はどうでした？」

撫子も自分の椅子から大和と向かい合うようにベッドへ腰掛ける。

「動揺してたさ。」

「思ったとおりですね。」

「まあな。あと、少し面倒なことになった。」

「面倒なこと？」

撫子が怪訝そうな顔をした。

「シャルルが自分の正体をみんなに明かしたら、俺も自分のことを話さないといけないらしい・・・。」

「でも、それは・・・。」

「ああ、彼らを巻き込むことになる。」

ソレスタル・ビーイングは世界の裏の仕事をを行う組織。

表の世界に生きている一夏達を巻き込むわけにわいかないと二人は思っていた。

「まあ、俺の生い立ちぐらいなら話しても構わないだろう。」

「そうですね。でも、わたしの生い立ちは彼らには少し刺激がきついかもしれません・・・。」

「・・・すまない。」

「ヤマトが気にすることはありませんよ。」

その後、二人は口を閉じた。

「撫子。この前頼んできたお土産だが・・・。」

先に口を開いたのは大和だ。

そう言つて、大和は自分のバッグから小さな箱を取り出し撫子に手渡す。

「ありがとうございます!」

撫子がとびきりの笑顔を大和に向ける。

「ま、まあ、大したものじゃないんだがな・・・。」

大和はいつになく落ち着きがなく、頬も少し赤い。

「開けていいですか?」

「ん?ああ。開けてみてくれ。」

撫子が包み紙を丁寧に開き、箱の蓋を開く。

そこにはシルバーのネックレスが入っていた。

ネックレスにはリングが一つ通してある。

「気に入ってくれたかな?」

「はい!」

そうか、と大和は呟き、少し満足そうな顔をした。

静まり返ったアリーナに銀髪の少女が一人立っていた。

その少女の名はラウラ・ボーデヴィツヒ。

ドイツ軍『シュヴァルツェ・ハーゼ』通称、黒ウサギ隊に所属し、その部隊の隊長を務めている。

「私は認めない……。あの男があの人の弟であるなど……。」

そう言ってラウラは左目につけている眼帯を外した。

眼帯を外したことで露になった左目は、赤色である右目と対照的な金色をしている。

「私は……、認めない……。」

少女は一人、夜空を睨みながら呟いていた。

深夜の襲撃者（前書き）

一週間ぶりです。

更新が遅くて申し訳ありません！！

深夜の襲撃者

深夜

IS学園から100km離れた海上を一機のISが移動していた。
そのISの進路はIS学園。

「・・・気付かれたか。」

「普通なら気付かないな。」

「ということは、テムエは特別か？」

そのISの行く手にヴァーチエを身に纏った大和がいた。

ISの操縦者と思われる人間からオープンチャンネルで通信が来た。

「どうかな・・・。」

「ハッ！言ってくれるぜ！こいつは普通のレーダーなんかには引つかからないって聞かされてるのによ！」

「・・・確かにそうだな。」

そのISからはオレンジ色のGN粒子を放出している。

「・・・それはISか？」

「詳しいことは知らねえが、男である俺が動かしてんだ、ISじゃねえかもな。」

「そうか。付け加えるなら、お前はその機体に乗ってはいないな。どこか別の場所で遠隔操作してるんだろっ？」

「！？テムエそんな事まで！？」

雲に隠れていた月が出てき、二人を照らす。

そのISは大和と同じ全身装甲フル・スキャン、機体の色は赤に近いオレンジ色、

右肩に大剣、左腕には銃のようなものが取り付けてある。

「名前は？」

「おいおい、人に名前を尋ねるときは自分から名乗るものだろ？まあいい。サーシエス、アリー・アル・サーシエスだ。よろしくな、IS委員会のお犬さん。」

サーシエスと名乗った操縦者は少しおどけたような口ぶりで答える。

「目的は何だ？」

「目的、目的ねえ……。まあ、クライアントからの依頼つてのもあるが……。」

「……。」

「お前さん。戦いは好きかい？」

大和は何も言わず黙っている。

「俺はねえ、戦いが好きなんだよ。戦が好きで好きでたまらない、人間のプリミティブな衝動に殉じて生きる、最低最悪の人間なんだよ……！」

そう言い終わるが早いか、サーシエスは右肩にある大剣『GNバスターソード』を右手に構え、大和に斬りかかる。

大和はそれを右手に呼び出したビームサーベルで受け止める。

（ッ……！早い……！）

サーシエスのバスターソードを受け止めはしたが、かなりギリギリだった。

「ハッ！やるじゃねーか！楽しませてくれよ！！委員会のガキ！」
「それは、どう、もっ！」

大和はGN粒子をチャージした状態でGNバズーカを呼び出し、呼び出した瞬間にサーシエスに向け撃つ。
それをサーシエスは、機体をねじりながら仰け反って躲すが左腕を失った。

「クソがッ！！やってくれたな！」

（あれを躲すか……。ほぼゼロ距離で撃ったんだがな……。）

普通の人からすれば直撃のはずの攻撃をサーシエスは躲したのだ。
お互い相手との距離を取り、様子を伺っている。

（あの反射神経、操縦センス。やはり只者ではないな……。）

「避けたと思ったんだがなあ……。機体が追いついてねえなあー。……」

サーシエスは一人呟きながらバスターソードを構え直す。

大和は右手のビームサーベルを収納し、GNバズーカを呼び出す。
呼び出すと同時に左腕のGNバズーカから圧縮粒子をサーシエスに向けて撃つ。

「バカのひとつ覚えか！？そんなモン当たるか！！」

サーシエスはそれを躲し大和に迫る。

今度は右手のGNバズーカからサーシエスに向けて圧縮粒子が放たれる。

しかし、それもサーシエスは躲す。

「チツ！」

「貰った！！！」

サーシエスはバスターソードを振り下ろし、左腕のGNバズーカを叩き斬る。

左腕に装備していたGNバズーカは粒子圧縮チャージが進んでいたため、大きな爆発を伴い壊れた。

その爆発の威力はかなり大きかったらしく、ヴァーチェの左腕の装甲はかなり破損していた。

（ビームサーベルもやられたな……。）

左腕に格納されていたビームサーベルは装甲の破損に伴って壊れ、使用できなくなった。

（あれを使うか……。GN粒子のチャージは終わっているしな……。）

「これでお相子だな！？え！？」

サーシエスは挑発的に話しかける。

「……。そつだな。」

「冷めた野郎だな！だが、これでどうだ！！」

言い終わるが早いかサーシエスは腰のコンテナから『GNフアング』を6基射出する。

「行けよ！ファング！！」

サーシエスの掛け声と共に6基のファングが大和に迫る。

「ッ！！」

6基のうち3基は先端にビームサーベルを展開し大和に突撃する。

（セシリアよりもビットの操縦が上手い！！撫子と同等かそれ以上だ！！）

大和はファングを紙一重で躲しながら、ら右手に装備していたGNバズーカを左手に持ち替え、代わりにビームサーベルを展開し、最後に突撃してきた1基を破壊する。

さらに、大和から遠ざかる突撃してきたファングを、左手に持ち替えたGNバズーカでまとめて破壊する。

「そこだ！！」

ファングを破壊する際、動きの止まった大和に対し大和の周囲で待機させていたファングからビームが放たれる。

（間に合わない！！）

ファングを確実に仕留めるため、GNバズーカの粒子放出時間を長くしていた大和。

それが仇となり、ファングからのビームが直撃する。

「ぐっ！！」

初撃こそ直撃を許したが、2撃目以降はGNフィールドを展開し防いだ。

「やるじゃねえか。しかも、なんだ？その装甲の強度？普通のISなら1撃で装甲が吹き飛ぶのによっ！！」

フアングのビームは確実にヴァーチェの右足に被弾したはずなのに、機体へのダメージはサーシエスが思っていたほどではなかった。

「まあ、いつまで耐えられるかな？」

この間もサーシエスはフアングからビームを連射し続ける。

（このままでは決着がつかないな……。やるか……。）

大和はGNフィールドを解除しビームサーベルを振りかぶって、サーシエスに突撃する。

その間、フアングからのビームが大和を襲うが、お構いなしにサーシエスへ迫る。

ビームサーベルの間合いまで接近したところで、大和はビームサーベルをサーシエスへ振り下ろす。

しかし

「フアングは8基あるんだよ！！」

サーシエスはコンテナから残りの2基を射出し、ビームサーベルを展開した状態で大和へ突撃させる。

「トランザム
TRANS - AM！！」

大和が叫ぶとヴァーチェは赤色に発光し、その瞬間サーシエスの前から消える。

ヴァーチェがいたはずである空間にファングが突撃する。しかし、そこには何もない。

サーシエスは完全にヴァーチェを見失った。

「消えた!？」

「違う。」

「テメエ!! 何処だ!？何処にいる!？」

「下だ!!」

トランザムによる機体スツペクの上昇を利用し、大和はサーシエスの目の前から高速で移動。

サーシエスの真下にヴァーチェを誘導したのだ。

サーシエスが下を確認したとき、大和は新しい武装を展開し攻撃を加える瞬間だった。

「GNキャノン、高濃度圧縮粒子、完全開放!!」

その掛け声と共に、ヴァーチェの腰に展開されたGNフルバーニアの先端部に内蔵されたGNキャノンから、ピンク色のビームが放たれる。

そのビームはGNキャノンとは比べものにならない太さだ。

海上から、天に向かって伸びるその粒子の柱は、遠く離れたIS学園からも確認できるものだった。

それを見た学園の生徒曰く、「夜が開けたのかと思った。」とのことだ。

「・・・やりすぎた。」

GNキャノンを収納し、トランザムを解除した大和が呟いた。
サーシエスの駆っていた機体はGNキャノンにより蒸発し、跡形も
なかった。

「さすがに始末書ものかな？やれやれ……。」

そんなことを言いながら、大和はIS学園に進路を向けた。

（しかし、トランザムまで使わされるとは……。やはり、アレの
完成を急がないとな……。）

大和の表情はいつもと変わらずポーカーフェイスだが、内心はいつ
になく焦っていた。

深夜の襲撃者（後書き）

ノリでサーシェスを出しました。
今後の展開をどうしよう・・・。

立ち込める暗雲（前書き）

一週間ぶりの更新です。

設定と設定2に追記しました！

立ち込める暗雲

「あーあ。もう逝っちまったか……。」

サーシエスはそう吐き捨てながら頭や、手足についていた遠隔操作用のコントローラーを乱暴にはずしている。

「もっと俺の操縦を反映してくれないかな。動きが遅すぎるんだよね。」

サーシエス是不敵な笑みを浮かべながら、同じ部屋にいるMに愚痴をこぼす。

「……システムの再設計が必要だな。早急に行う。」

サーシエスの愚痴にMが答える。

「早急に頼むよ。」

そう言いながら一人の男が入ってきた。

身長はあまり高くなく、顔はその言動から比べると少し幼く見える。

「!?!?!? 来ていたのか。」

「よお、大将!」

Mは明らかにバツの悪そうな顔をし、サーシエスは相変わらずおどけた声で挨拶する。

「僕がここにいないのはいけないことかな? M?」

「そんなことはない。ただ、少し驚いただけだ。」

「そうかい。それで、いいデータは取れたかな？」

「それは問題なく。」

「なら良かった。」

それだけ言つて、今度はサーシエスの方に顔を向ける。

「今回は残念だったけど、君には期待しているからね。次は派手に頼むよ。」

「ハッ！そういう頼みは十八番おはじだぜ、大将！！」

「それはよかった。」

サーシエスの返答に満足そうな笑みを浮かべ、男は部屋を後にした。

「つまりね、一夏が勝てないのは単純に射撃武器の特性を理解していないからなんだよ。」

土曜日、午後の自由時間に一夏達は全開放されているアリーナでI Sの実習をしていた。

メンバーは一夏、箒、セシリア、鈴そしてシャルルだ。

普段は参加している撫子は用事があるということで不参加。

サーシエスの襲撃（未遂）があつて数日が経つが、生徒達には知ら

されていない。

大和はあの後、サーシェスの襲撃を理事会に報告はしている。だが、生徒に不要な心配をかけさせたくないという理事会の意向により、公表はされていない。

大和は今回の襲撃について報告するようＩＳ委員会から召集を受け、昨日から学園を留守にしている。

一夏達には家庭の事情と誤魔化して出て行った。

「そ、そうなのか！？一応、わかっているつもりなんだが……。」

シャルルが転校してきてからは一夏のトレーニングにはシャルルも参加している。

箒やセシリア、鈴よりも説明が分かりやすいので、はかどっているようだ。

撫子も教えるのは上手いのだが、スパルタなもので一夏はつい行くのでやっという状態。

そんな状態なのであまり身につかない。

「知識として知ってるだけ、って感じかな？今日の模擬戦も含めて、

一夏は全然距離を詰めれてなかったしね。」

「た、確かに……。」

一夏は昨日までの模擬戦と今日の模擬戦での自分の動きを思い出し納得する。

「それに、白式には雪片式型しか武器がないんだよね？尚更射撃武器の特性を理解しないと戦えないよ？」

「ああ。でも、何をすればいいんだ？」

「そうだね……。取り敢えず、射撃武器を試しに使ってみようか！」

シャルルの提案により一夏は射撃訓練をすることになった。

「他のヤツの装備って使えないんじゃないのか？」

「普通はね。でも、所有者がアンロックすれば登録してある人全員が使えるんだよ。」

「へえ。」

「じゃあ、これ。」

そう言っただけでシャルルは一夏にアサルトライフルを渡す。

「構えは……。こうで……。いいのか？」

「ええっと、脇を閉めて。それと、左腕はこっち。わかる？」

「……。よし！」

シャルルの補助で一夏はアサルトライフルを構える。

「ねえ、あの二人仲よすぎるのと違う？」

「むううう……。」「」

鈴の言葉に、箒とセシリアは唸りながら肯定していた。

「ねえ、アレ！ドイツの第3世代型じゃない！？」

「うそ！？まだ、本国でもトライアル段階って聞いたけど……。」「

一夏がシャルルから借りたアサルトライフルを1マガジン使い切ったところで、アリーナで実習を行っていた他の生徒が声を上げる。アリーナのカパルト上に自身のIS『シュヴァルツェア・レーゲン』を展開したラウラがいた。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ・・・。」

セシリアが忌々しげにラウラを睨む。

「なに！？アイツなの！？一夏を引っ叩いたっていうドイツの代表候補生って！？」

話は聞いていた鈴も睨み、身構える。

「くっ！！」

筈は普段から鋭い目を一層鋭くし睨む。

「織斑 一夏。」

オープン・チャネルでラウラが話しかける。

「なんだよ？」

ぶつきら棒に返答する一夏。

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い。私と戦え。」
「嫌だ。理由がねえよ。」

ラウラに拒否をいい、視線を外す一夏。

「貴様になくとも私にはある。」

静かに言葉を続けるラウラ。

「今でなくてもいいだろ？もうすぐ学年別トーナメントがあるんだし、その時で。」

相変わらず愛想なく返答する一夏。

「・・・ならば。」

静かに目を閉じたラウラが再度目を見開き、右肩のレールカノンを一夏に向けて弾丸を放つ。

「げっ！！」

「ッ！！」

「！？」

ラウラからのいきなりの攻撃に驚く一夏。

その弾丸をシャルルが一夏とラウラの間に割って入って防ぐ。

その行動にラウラは一瞬顔を顰める。

「こんな人が密集した場所で戦闘を始めるなんて、ドイツの人は随分沸点が低いんだね・・・！！」

ラウラに対しシャルルはやや皮肉を込めて言い放つ。

「フランスの第二世代型^{アンティーク}如きが、私の前に立ちふさがるとは・・・。」

ラウラは挑発的に返答する。

「未だに量産型の用途が立たないドイツの第三世代^{ルーク}よりは動けるだろっからね！！」

負けじと、シャルルも挑発的な物言いをする。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

ラウラとシャルルは武器を構えたまま睨み合う。

「その生徒！！何をしている！！学年とクラス、出席番号を言え！！」

異変に気づいたアリーナを監督している教師がスピーカーで叫ぶ。

「・・・・・・・・今日は引こう。」

興がさめたのかラウラは展開していたISを解除し、その場を後にした。

「・・・・・・・・また面倒なことを・・・・・・・・。」

一夏達のいるアリーナの観客席から一部始終を見ていた撫子が、頭を抱えながらぼやいた。

「大和があんな事を言うから・・・・・・・・。」

撫子は、今この場にいない自分の上司の愚痴を人知れず呟いた。

立ち込める暗雲（後書き）

何を思ったのか投稿した話を消してしまいました（汗
内容は消す前と変わってません。

交錯する思惑（前書き）

書き終わって思いました。

なんでこうなった！？

交錯する思惑

「以上で報告を終わります。」

「ご苦労だったな、片桐准将。」

薄暗い部屋の中、大和は椅子に座っていた。

その椅子からやや距離を取った場所に中年かそれ以上の歳の人達がいる。

彼らは大和を見下ろす位置にある席に座っていた。

メンバーはIS委員会の委員長、副委員長2名、監査官2名、ソレスタル・ビーイング司令と副司令である。

「ところで、片桐准将。君は以前、GNDライブは自分にしか作れないといったね?」

一人の監査官が口調とは裏腹に厳しい顔つきで大和に質問する。

「・・・はい。」

大和は静かに答える。

「ところがどうだ? 今回の襲撃未遂のIS、そして、以前IS学園に襲撃してきた謎の無人ISにもGNDライブが搭載されていたではないか?」

「・・・・・・・・・・。」

「左様。GNDライブこそ我々のアドバンテージだったのだ。それがどうだ? 我々以外にもGNDライブをもつ者が現れたぞ?」

「・・・・・・・・・・。」

大和は監査官達の話静静地に聞いていた。

（彼らの狙いはGNドライブの製造方法の開示だろうな……。だが、教えるわけにはいかない。）

監査官たちの話を聞きながら彼らの狙いを考えていた大和。その考えは間違っていないかった。

「そろそろ開示するべきではないかな？ 准将？」

「……何をですか？」

（やはりか……。）

自分の考え通りの展開に、心の中で苦笑しながら大和はとぼける。

「とぼけないでくれ！」

監査官の1人が声を荒らげる。

「GNドライブの製造方法を開示せよと言っているのだ！ 准将！」

声を荒らげた監査官が続ける。

「それは貴方がた、IS委員会のトップの総意によるものですか？」

「そうだ。」

「当然だ。」

大和の質問に答えた監査官達をIS委員会の他のメンバーは驚いた顔をする。

「いつそんな決断を下した！？私は知らんぞ！？」

副司令の声には明らかに動揺がある。

「我々もだ！そんな議論は一度も行われていない！！」

副委員長の声にも動揺が含まれている。

「何を言っているんですか！？我々は貴方がたの考えを代弁しているんですよ！？」

監査官も驚いたような声を出す。

ここで、委員長が口を開く。

「・・・監査官、はつきりいましょう。私はGNDドライブの製造方法は開示する必要はないと考えています。」

「！！？」

委員長の言葉に監査官達は目を見開き驚いた。

「委員長！？何を言っているんですか！？」

監査官の怒声に近い声とは対照的に、委員長は諭すような口調で続ける。

「^{我々}国際IS委員会がGNDドライブの製造方法を知ったという情報を
大国が嗅ぎつければ、必ず開示要求が来る。」

「・・・・・・・・。」

「恐らく、技術の共有という名目の下な……。そうなれば、我々としても開示せざるを負えなくなる。」

「しかし！委員長のお考え通りになるとは……」
「問題は、その次の段階なのだよ。」

監査官が言い終わる前に委員長は口を開く。

「各国にGNドライブの技術が広まれば、必ず亡国機業にも伝わる。そうなれば、より我々の脅威になることは目に見えてわかる。」

「しかし……！」

「異論は認めない。」

食いつく監査官に委員長は有無をいわさない口調で割って入る。

「片桐君にはGNドライブ以外にも様々な技術を提供して貰っている。それで十分ではないか？」

「………。」

「GNドライブ、ヴェーダ、Eセンサー……。どれも我々の持つ科学技術を越えている。これだけ提供され、君はまだ何を望むのかね？」

「……わかりました。」

さすがにこれだけ言われてしまつては監査官も黙るしかなかった。

「……委員長。」

委員長と監査官のやりとりを黙って聞いていた大和が口を開く。

「何かな？大和君？」

「GNドライブの製造法は開示するわけにはいきませんが、代わりにこれを。」

そう言つて、大和は足元においていたアタッシユケースからあるものを取り出す。

「!?!それはISのコアかね!?!」

委員長は驚きを隠せずに大和に問う。

「はい。私が作成したオリジナルのISコアです。」

「・・・君も作成できたのかね?」

「これが完成したのは先週のことです。以前から進めていましたが、やっと完成しました。」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

大和の言葉にその場にいた全員が沈黙する。

「・・・よもや、篠ノ之 東博士以外でコアを作る者が現れるとは・・・。」

沈黙を委員長が破る。

「・・・准将。このことを我々以外に話したかね?」

委員長に続き、ソレスタル・ビーイングの司令が口を開く。

「いえ、この件についてはあなた方以外には話していません。」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

またも沈黙。

しばらくの沈黙の後、大和が話を続ける。

「私が作成したコアは、篠ノ之 東博士が作成したコアと全く同じものです。ただし。」

大和が一旦話を区切る。

「・・・ただし、何かね？」

催促するように委員長が続きを促す。

「私の作成したコアはGNドライブの搭載を前提としたものです。」

「・・・それが意味することは？」

今度は司令が話を促す。

「GNドライブが、GN粒子と共に生み出すエネルギーをシールドエネルギーに転換する能力を与えました。」

「なっ!？」

「「・・・」」

司令は驚き声を漏らす。

監査官二人は何か意味深な顔をしながら大和を見ている。

「つまり、ISの稼働時間が延長できるということかね!？」

副司令はやや興奮した声で聞く。

「はい。擬似GNドライブでも稼働時間・・・つまり、GN粒子生成時間は既存のISの稼働時間を軽く超えます。」

「それで、どのくらい延長可能なんだ？」

「稼働時間の延長は理論上で3倍となっています。もっとも、オリ

ジナルのGNドライブを用いれば、稼働時間は半永久的なのですが・
・。。」

話し終わると、委員長と副委員長達は小声で話し合い、意見がまとまったのか大和に再度話しかけた。

「現在、君の作ったオリジナルのコアはいくつあるのかね？」

副委員長の1人が大和に問う。

「現在はこれだけです。」

「量産化は可能か？」

別の副委員長が問う。

「現状では難しいです。断言はできませんが、数ヶ月で量産化は可能になると思います。」

「それで。。。」

委員長が口を開く。

「今回は何が条件だ？」

委員長はやや困ったような口調で問う。

「話が早くて助かります。今回もいくつかあります。」

「何時も通りか。。。。可能な範囲で実現しよう。。。。」

溜息交じりに委員長が答える。

「まず1つ目です。私に4日間の休暇を下さい。」

「?そんな事でいいのか?」

司令がポカンとした表情で聞き直す。

「はい。ただし、その間は私へ一切の連絡をしないで頂きたい。」

委員長はしばらく考え、司令の許可が降りるのならいいだろうと言ってその条件を飲んだ。

もちろん、司令、副司令ともそれについては了承し、許可した。

「2つ目ですが、このコアを用いた新しいISの開発を許可していただきます。」

「許可しよう。却下する理由がない。必要なものがあればいつでも申請してくれ。」

「ありがとうございます。その他の条件は、その時が来た際にお伝えします。」

「あまり無理難題を言ってくれるなよ。」

委員長は苦笑いしながら答える。

「今日はもういい。例の任務に戻ってくれ。」

指令が退出を許可する。

「はっ!休暇の詳しい日程は後日お伝えします。では、失礼します。」

大和は敬礼し退出した。

交錯する思惑（後書き）

大和もコアを作れるようになりました。

なんで、こんな設定を追加したんだろう・・・。
自分にもわかりません。

シャルルの正体

「・・・そんなことがあったのか。」

「はい・・・。」

IS委員会への報告が終わり、学園の寮の自室に帰った大和は撫子から昼間に起きた事件の一部始終を聞いた。

「ずいぶんと大胆な行動に出たものだな・・・。」

大和がメンドクサそうな声を出す。

「申し訳ありません。わたしが事前に気付いていれば・・・。」

撫子が申し訳なさそうに謝る。

「過ぎたことを言っても仕方ない・・・。今後はラウラの一夏に対する行動に注意するしかないな。」

「はい・・・。」

その後、夕日で赤くなっている部屋の中で、大和と撫子は今後の行動について確認した。

「少し早いが夕食にするか。」

一段落したところで大和が撫子に提案する。

「そうですね。ちょうど食堂が使える時間ですし。」

撫子もそれに同意し食堂へ向かう支度をする。

といっても、財布を手にとったり、PCをスリープにするだけなのだが。

支度が済み、食堂に向かうとした瞬間。

コンコンッ・・・

誰かが部屋のドアをノックする。

「大和いるか・・・？」

声の主は一夏だった。

しかし、その声に元気がない。

「今開ける。・・・どうした？」

自室のドアを開け、部屋の前に立っている一夏に大和は問いかける。

「少し相談があるんだけど、いいか？」

一夏は困惑した顔をしながら部屋を尋ねた理由を言う。

「・・・わかった。撫子、すまないが夕食は一人でとってくれるか？」

「わたしは待ちますが・・・。」

「いや、いい。先に食べてくれ。」

「・・・どうしてもですか？」

「ああ、頼む。」

撫子は渋々承諾し、部屋を後にした。

「今から夕食だったのか？悪いな……。」

大和の部屋に入ると、一夏が申し訳なさそうに謝る。

「気にするな。それより、相談って？」

「ああ……。」

大和の問に、一夏は覇気のない声で返答する。

「大和は……、大和ならどうする？父親の命令で……。」

一夏がそこまで言ったところで大和は口を挟む。

「私に相談するまでもなく、お前はもう決めてるんだろう？」

「え？」

大和の言葉に一夏はポカンとした顔をする。

「……相談を持ち掛けられたんだ、一応アドバイスをしよう。自分の正しいと思ったことをやり通せ、その人のためにな。そして、自分が後悔しない為にも……。」

「大和……。。。。。。ありがとう!!」

その言葉を聞いた一夏の目に、いつもの光が戻った。

「手間を掛けさせたな。」

「気にするな。それより、早く行動に移せよ。その決意が揺らぐ前にな。」

試すような言葉を大和は一夏に言う。

「揺るがねえよ!!」

「そうか。」

一夏はニツと笑って大和の部屋を後にした。

（シャルルの正体が一夏にバレたか……。まあ、あの調子だった
らバレるのも時間の問題だったかな……。）

脳量子波で一夏の思考を読み取っていた大和は、一夏が口に出さな
かったこともわかっていた。

（またフラグを立てなければいいが……。）

大和の心配は良くも悪くも裏切られる事になる。
それを大和が知るのとはそう遠くない未来のことである。

《やっぱり、彼^{シャルル}関連のことだったんですね。》

《ああ。しかし、一夏^{アイツ}なら解決するだろう。彼……。いや、彼女
の闇を。》

《そうですね……。》

一夏が部屋を出た後、大和は食堂へ向かった。

先に食堂へ行った撫子はちょうど食べ始めたところだったので今は
同じテーブルで食事をしている。

因みに、上の会話は脳量子波を使ったものなので他の生徒には聞こ
えていない。

さらに、口では別の会話もしている。

なんとも器用な事をする二人だった。

「毎度思うが、ここの学食はクオリティーが高いな。」

「ですね。無駄に予算をかけてませんか？」

夕食を済ませ、自室に戻りながら大和は学食のクオリティーについて今さらながら驚愕していた。

そのクオリティーの高さに撫子も同意し、烏滸がましくもお金について触れる。

「確かに。それに比べてウチは……。」

「……。」

「ハア……。」

ソレスタル・ビーイングでの料理のクオリティーを思い出し、二人は深い深い、マリアナ海溝よりも深い溜息をする。

ハッキリいうとソレスタル・ビーイングで出される料理は美味しくない。

どこぞのファーストフードの方がましなときもある。なぜこうなったかといえば、全て大和に原因がある。

大和が任務の度に関係ないものまで破壊し、その賠償請求がIS委員会に送られてくる。

1度や2度ならば委員会も何も言わないが、ほぼ毎度の事なのでソレスタル・ビーイングに振り分けられる予算から請求分をカット。そうになると、カットされた分をどこからか捻出しなければならない。

配備されているISの維持費はカットできない。

研究費（大和の個人的なものは除く）もカットできない。

人件費はメンバーからの猛反対を受けたのでカットできない（できなかった）。

ということで、必然的に食費がカットされたのだ。

「そもその原因が大和なのに、なんでわたし達まで被害を被らないと……。」

撫子が肩を落としながら嘆く。

「いや、申し訳ない。」

反省の色ゼロといった感じで大和が答える。

(……イラッ)

部屋に着くなり大和に対し撫子が制裁を加え、大和は轟沈した。
因みに、その時の撫子は阿修羅すら凌駕する存在だったそうだ (b
y 大和)

というか、自分の上官にそんなことをしていいのだろうか……。

シャルルの正体（後書き）

今回は大和と撫子のキャラが崩壊しています。
なんでこうなった！？

第3勢力（前書き）

遅くなって申し訳ありません!!
遅くなったうえに、短い・・・。

第3勢力

闇

深い深い闇

そこには一切の光がなく、ただ深い闇が広がっていた。

「・・・またか。」

その闇に一人、人が立っていた。

「いつ以来かな、此処に来るのは。」

不思議なことに、その空間は光がないはずなのにその人の周りだけ少し明るい。

「・・・・・・・・・・。」

その人は臆すことなくその闇を進む。

どれだけ歩いたのだろうか、その人の目の前に両手で持てる大きさの箱が見えてきた。

その人はその箱に近づいていく。

これも不思議なことに、その箱の周りも周囲より少し明るい。まるで、見つけると言わんばかりに。

その人は箱の目の前で立ち止まる。

箱はその空間と同じく黒。
すべてを飲み込むような深い黒。

その人は無言でその箱を開け、中を覗く。

「・・・ああ、わかってる。・・・忘れてなどいない。」

どれくらい時間が経ったのだろうか、不意に男は呟いた。
その呟きが言い終わるとともに、その人と箱は闇から居なくなっていた。

「機体の方はどうだ？」

薄暗い部屋の中で男が誰かと話している。

「1機は既に完成している。今はテスト飛行で出払っているがな。
もう1機ももう少しで完成だ。残りの1機はシステム面での見直し
と装備の製作に手間取ってな、少し遅れている。」

通信機越しで声が返ってくる。
その声も男の声だった。

「夏までには間に合うか？」
「間に合わせるさ。」

男の声には自信が満ち溢れていた。

「頼む。どちらにせよ、完成には例のものが届かないとな・・・。」
「・・・そうだったな。ま、それは来月までには届くだろう。」
「ああ。」

「それが届くときはこっちに来るんだろう？他のメンバー」
「すまない。人が来た。また連絡する。」

そう言つて男は通信を一方的に切つた。

「やれやれ・・・。」

モニターが所狭しと置かれた部屋で、男は溜息交じりに通信を切つた。

「彼から？」

男の背後から女が声をかける。

「ああ。機体の進行状況とかを聞かれた。」
「そう・・・。」

声をかけた本人は素っ気なく返答する。

「あたしの機体はもう少しで完成なんだけどね。」
「嫌味か？ベスタ。」
「そんなんじゃないわよ。」

ベスタと呼ばれた女性は言葉こそ否定的だが、口調はそうではなかった。

「ま、いいさ。ところで、なんのようだ？」

男はベスタの方を向き訪ねてきた理由をきく。

「理由がないと来ちゃだめなの？」

「・・・質問に質問で返すな。」

「はいはい、スミマセンスミマセン。」

小馬鹿にしたような口調でベスタは謝る。

「ネルガルが帰ってきたわよ。」

「帰ってきたか・・・。」

「帰ってくるなり、あなたを呼んでたわよ。クオート。」

そのことを聞くなり、かなり面倒そうに頭を掻きながら、クオートと呼ばれた男は返答する。

「ああ、すぐ行く。」

「ネルガルは第一格納庫にいるわ。」

「オーライ。」

ベスタにヒラヒラと手を振りながらクオートは部屋を出た。

大和の介入（前書き）

最近、更新が非常に遅れてもおうしわけありません。
何かと本業が忙しいもので・・・。
言い訳はこれぐらいにしたいと思います。

大和の介入

「やめろー！ー！ー！！！」

白式を見に纏った一夏が、零落白夜を発動させた雪片でアリーナのバリアを破り、セシリアと鈴のもとへ飛んで行く。

時間は少し戻って、授業終了直後。

「一夏、今日もISの特訓するんだよね？」

「ああ、もちろんだ。シャルル。」

「わかった！じゃあ、先に行って着替えてるね！」

満面の笑みを浮かべてシャルルは教室を出た。

その笑顔に一夏は一瞬ドキツとしたが、周りに変な誤解を生みそうなので、すぐに表情を戻した。

「わ、私も参加していいか、一夏？」

「箒！構わないぜ。でも、お前ISは・・・？」

「も、問題ない。学園に『打鉄』の使用許可を取ってある！！！」

そう言って、箒は胸を張る。

その時、箒の胸が揺れ、一夏は一瞬見とれたが、すぐに視線を逸らした。

「わ、わかった。じ、じゃあ、アリーナで待ち合わせな。」

苦し紛れに一夏は返答した。

その返答に、箒は嬉しそうな顔をし、遅れるなよと言って教室を出ていった。

その一部始終を大和と撫子は遠巻きに見ていた。

「撫子。念の為、私は一夏の特訓を見に行く。」

「わかりました。では、わたしはラウラを監視しておきます。」

「・・・そのラウラは既に教室に居ないが？」

「・・・・・・・・。」

撫子は急いで荷物をまとめ、小走りに教室を出て行った。

「やれやれ・・・・・・・・。」

大和は溜め息をつきながら荷物を纏め、アリーナに向かった。

一夏がアリーナの更衣室に入るとシャルルはすでに着替え終わっていた。

「一夏。僕は外で待ってるね。」

一夏の方を向きシャルルが笑顔で声を掛ける。

ちなみに、シャルルが女ということは一夏にはバレている。

「おう。・・・ああそうだ。シャルル、今日は箒も一緒に特訓するから。」

「そう・・・・・・・・。」

「？」

すれ違い様に一夏は箒も参加することを告げると、シャルルの顔は少し曇った。

しかし、シャルルの顔が曇った理由を一夏はわからなかった。

それでこそ我らが一夏なのだが・・・。

「こ、これは・・・!!」

「酷い・・・!!」

「ッッ!!」

アリーナの入り口で箒と一夏とシャルルは合流した。

その時、アリーナで代表候補生が模擬戦をしているといと他の生徒が言っていたので、嫌な予感がした3人は急いで観客席に向かう。

そこには、一方的にセシリアと鈴を攻撃するラウラの姿があった。

「やめろ!!ラウラ!!なんでこんなことをするんだ!?!やめろ!!」

一夏はアリーナのバリアを叩きながら叫ぶ。

それに気付いたのか、ラウラは一夏の方を向き嘲笑うかのようにニヤリと笑う。

「クソッ!!」

一夏はアリーナのバリアから少し離れ白式を展開する。

そして冒頭のシーンになる。

ラウラの専用機シュヴァルツェア・レーゲンに搭載された武器の一つ、ワイヤーブレードに拘束されたセシリアと鈴を助けるため、一夏は彼女達のもとに飛び込んでいく。

しかし、一夏の目の前を一つの人影が通過する。

その人影はラウラとセシリア、鈴の間に飛び込み、ラウラのワイヤーブレードのワイヤーを手にとっていたIS用近接ブレードで切り、そのブレードの剣先をラウラに向ける。

「「なっ!?!」」

「えっ!?!」

「あ、あなたは!?!」

一瞬の出来事に二人のもとに着いた一夏は動きをとめ、一夏に続き、ISを展開してラウラの方へ向かっていたシャルルも、銃口をラウラに向けたままその場で静止した。

ちなみに、先程のセリフは上から一夏& a m p・箒、シャルル、ラウラの順だ。

「やれやれ・・・、何をしているんだ?お前は・・・?」

表情ははいつもどおり(つまり、ポーカーフェイス)だが、その声は怒りと呆れ、そして、ほんの少し悲しみが混じったものだった。
・・・というか、そんな声ってどんな感じだ?

「や、大和（殿）！！」

一夏、箒、シャルル、ラウラが一斉にその名を叫ぶ。

「・・・一夏、シャルル。セシリアと鈴を頼む。」

「あ、ああ・・・。」

大和の声で我に帰った二人はセシリアと鈴を抱え、二人を安全な場所に運んだ。

それを横目で確認した大和は話を続けた。

「さて・・・、言い訳を訊こうか？」

「・・・。。。。。。。」

大和の問にラウラはただ黙っていた。
その目は明らかに動揺していた。

ラウラが一向に話しそうにないため、大和は構えを解き、ブレードを肩に担ぎながら話し始めた。

「・・・前に、後悔のないようにしろ、といったな？」

「・・・。。。。。。。。。」

「その答えがコレか？」

「・・・。。。。。。。。。」

「だとしたら・・・。」

「やれやれ、私の出番は無しか・・・。」

大和の言葉を遮り、黒のスーツを身に纏った教師が歩いてきた。

「織斑先生・・・。」

大和は歩いてきた教師の方を見ながらその人の名を口にする。

「模擬戦をするのは構わん。だが、アリーナのバリアを破壊する事態になつては教師として黙認しかねる。」

「・・・・・・。」

大和は黙つて千冬の言葉を聞いていた。

「この決着は学年別トーナメントでつけてもらふ。いいな？」
「・・・・だ、そうだ。ラウラ？」

千冬の言葉を確認するようにラウラへ問いかける大和。

「教官と大和殿がそう仰るなら・・・・。」

そう言い終わると、ラウラはISを解除した。

「織斑、いいな？」

未だ、セシリアと鈴の近くでポカンとしている一夏に千冬は確認する。

「あ、ああ。」

「教師への返事は『はい』だ、馬鹿者。」
「は、はい！」

千冬に叱責され言い直す一夏。

千冬の睨みもありその声はビビっていた。

「デュノアもいいな？」

シャルルの方に視線を移し、確認する千冬。

「僕もそれで構いません。」

シャルルの返答に「よし」と言いながら頷き、大和の方を向く。

「で、お前は？」

「・・・仲裁者に対してそれはないと思いますが・・・。」

「口答えか？」

千冬がドスの利いた声と、鬼もビビる睨みを大和に向ける。

「そんなつもりはありませんよ。」

そのドスの利いた声と睨みを意に介さず、普段どおりの調子で返答する大和。

「で、どうなんだ？」

「断る理由もないので従いましょう。」

ドスと睨みをますます強めた千冬に、顔色一つ変えず返答する大和。

「では、学年別トーナメントまで一切の私闘を禁止する！解散！！」

大和と千冬の介入によりその場は収まった。

保健室での騒動（前書き）

祝100,000アクセス突破！！

文章力のない作者ですが、見て下さった方々に感謝です！！

保健室での騒動

「別に助けなくても良かったのに！」

「あのまま続けていれば勝ってましたわ。」

その後、一夏とシャルルがセシリアと鈴を保健室へ連れていき、手当をした後、開口一番に言った言葉がそれだった。

「お前らな……。せっかく大和が助けてくれたのに、それはないだろ……。」

一夏は保健室のベッドで横になっている二人の姿と、その言葉のギャップに呆れていた。

幸い、怪我は打撲程度ですみ、他に体の異常はみられなかった。

「……一夏（さん）に助けてほしかったのに（ですわ）……。」

「えっ？何か言ったか？」

二人の独り言が良く聞こえなかったのか、一夏は聞き返す。

「「な、何でもないわよ（ありませんわ）！！」」

一夏の言葉を二人は全力で否定する。

その言葉を聞いた一夏は首をかしげながら頭にクエスチョンマークを作っていた。

「二人とも素直じゃないね。」

セシリアと鈴の独り言が聞こえていたシャルルは、笑いながら二人に飲み物を渡す。

「まったくだ。」

「……うわっ！！」「……」

一夏とシャルルの後ろからさっきまで居なかった筈の人の声が聞こえ、保健室にいた4人は驚いた。

突然のことに、セシリアと鈴は口に含んでいた飲み物を吹いた。声の聞こえた方を見ると、そこには声の主、大和が居た。

「驚かさないでよ大和！」

「ゲホッゲホッ！と、というか、大和さん。いつからそこにおられたのですか？」

シャルルはよほど驚いたのか、未だに肩で息をし胸を押さえている。セシリアは咳き込み若干涙目になりながら、大和に質問する。

「ホントよ！！アンタいつからそこに！？」

さっきまで咳き込んでいた鈴もセシリアに続き、犬歯をムキ出しにして問いただす。

「セシリアと鈴が本音を口にしたあたりからだ。」

「ほ、ほん、本音！？な、何のことかしら！？せ、セシリア知ってる！？」

「わ、わたくしにも、さ、さっっぱりですわ！！鈴さん！！」

大和の言葉を顔を真赤にしながら否定するセシリアと鈴。

そんなやり取りをシャルルは苦笑いしながら見ていた。
とうの一夏はといえば、やはり頭にクエスチョンマークを浮かべ、
首をかしげていた。

ドドドドドドドッ

ちょうどその時、地響きと共に保健室が揺れはじめた。

「なんだ！？地震か！？」

「ナニナニ！？何が起きたの！？」

一夏とシャルルはこの現象が何かかわらないので、戸惑いを隠せない。

「ツツ！！」

大和はこの現象の原因がわかっているのか、この後に起こるであろう事態を想像し、軽く舌打ちをした。

バンツ！！

大和が舌打ちをした直後、保健室のドアが飛んだ。
倒れたのではなく、飛んだのだ。

保健室に押し寄せる１年生によって。

ちなみに、このIS学園の生徒は三人（実際は二人）を除いて全て
女子だ。

そして、今その三人（しつこいようだが、実際は二人）は保健室に
いる。つまり、今押し寄せてきた１年生は全員、女子。

男子を求める女子の勢いは凄まじく、保健室のドアを吹き飛ばした
のだ。

そう、大和に向かって。

ガッ！！

スタスタ

ドン！！

「『『『え！？』』』」

飛んできたドアを大和は片手で軽々と受け止め、そのまま近くの壁に立て掛けた。

その時間は1秒にも満たない。

一夏達が呆気にと取られている間に、一夏とシャルルのまわりを女子が囲む。いや、包围する。

「織斑君！！」

「デュノア君！！」

「片桐君！！」

押し寄せた女子が一斉に名前を叫ぶ。

「ど、どうしたの！？皆！？」

「お、おい。落ち着けて……。」

「……………」

シャルルと一夏は困惑し、包围している女子をなだめる。

大和も包围されているのだがいつもと変わらず落ち着いている。

「『『『コレッ！！』』』」

包围した女子から一斉に、一夏達へ腕が伸びる。

その光景はシュールを超え、ある種の恐怖を感じさせる。

その手の一つ一つには一枚のプリントが握られている。

「な、何だ、これ？」

「・・・今月行われる学年別トーナメントは二人一組ツーマンセルに変更されたんだ。その案内とペア申請のためのプリントだ。」

一夏とシャルルは差し出されたプリントを受け取り確認しようとしたとき、大和が内容を簡潔に説明する。

「片桐君の言うとおりよ！」

「だから、ね？一緒に組もうよ、織斑君！！」

「私と組もう？デユノア君！！」

「私と組んで！！片桐君！！」

大和が説明し終わるやいなや、女子達は大和達をペアにせんと詰め寄る。

「あゝ・・・。ワルイ！！皆！！俺はシャルルと組むから！！」

一夏はそう言うと、シャルルの方に目配せする。

「え？あ、うん・・・、そうなんだ。皆、ゴメンね！！」

一夏の意図に気付いたシャルルは話を合わせ、申し訳なさそうに謝る。

「まあ、仕方ないか・・・。」

「男子同士も絵になるしねえ・・・。」

「他の女子と組むよりはいいか・・・。」

ギリリッ

女子の目は一斉に大和に向けられる。

「スマナイ。私はもうペアを組んでいる。」

その視線が何を求めているか察した大和は先手を打った。

「『『『『『『『『『『『ええ』』』』』』』』』』』」

大和から付きつけられた事実がショックなのか、その場にいた女子全員が悲鳴に近い声をあげた。

「もうペアを組んでたの！？」

「誰、誰と！？」

「ま、まさか、片桐さんと！？」

「それなら、仕方ないか……。」

「というか、片桐君と片桐さんのペアって誰も勝てないんじゃない？」

大和が一言もしゃべらないうちに憶測はどんどん広がる。

ちなみに、大和と撫子の実力はほとんどの生徒が知っているが、かなり脚色が増えられている。

男子と組めなかった上に優勝は絶望的とり、溜息を付きながら女子達は保健室を後にした。

「『一夏（さん）！！』」

女子が出て行った直後、セシリアと鈴は一夏に詰め寄る。

「アタシと組みなさいよ！！幼馴染みでしょ！？」

「でしたら！！クラスメイトとして、このわたくしと！！」

「・・・無理だな。」

「大和（さん）！？」

一夏達は一斉に大和の方を向く。

当の大和は電動ドライバーを使い、ドアを修理しているところだった。

「な、なんで！？アタシ戦えるわよ！！（というか、どこから工具を出したの！？）」

「そうですわ！！きちんと理由を教えてください！！（どこから工具を出されましたの！？）」

（どこから工具を出したんだ（ろう）？）

四人とも工具の出所を疑問に思っている中、大和は口を開く。

「山田先生からの伝言だ。二人ともISのダメージレベルが限りなくCに近いBだそうだ。」

「で、でも、それぐらいのダメージレベルなら修復が間に合うんじゃない！？」

「そ、そうですわ！！」

「確かにそうだ。だが、修復が間に合わず、その状態で出場した場合は後々重大な欠陥を生むぞ？」

ドアの修理が終わり、一夏達の方に歩きながら大和は続ける。

「「うつ・・・。わかったわよ（ましたわ）・・・。」」

二人は渋々了承した。

「アンタ達！！絶対優勝しなさいよ！！」

「わたくし達の方まで頑張ってくださいな！！心から応援いたしますわ！！」

一夏とシャルルの方を向き鈴とセシリアは二人を激励する。

「お、おう。任せとけ。」

「ありがとう。二人の気持ちに答えられるように頑張るよ。」

一夏とシャルルも二人の激励に答える。

保健室での騒動（後書き）

今回は一週間で更新できました！！
来週も更新できればいいんですが・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2089s/>

IS インフィニット・ストラトス ~もう一人の天才~

2011年9月1日21時57分発行